

ナディア

ノエル・カワード作

海老沢 計慶 能美 武功 共訳

G・B・スターンに捧ぐ（彼がいなければ…）

（題名に関する訳註 原題はThe Queen was in the Parlour。これはイギリスのマザーグースの「A song of Sixpence」の中の一節。「じつそりと女王さまはつまみ食い」とでも訳すところ。この歌は当時のイギリスの皇室を皮肉ったもので、カワードがこの題を採用したことから考えると、この「つまみ食い」は夫以外の男性の意味らしい。参考のため、以下この歌の全文を載せておく。）

Sing a song of sixpence a pocket full of rye

Four and twenty blackbirds baked in a pie

When the pie was open the birds began to sing

Now wasn't that a dainty dish to set before the king

The king was in the counting house counting out his money

The queen was in the parlour eating bread and honey

The maid was in the garden hanging out the clothes

When down came a blackbird and pecked off her nose.)

登場人物

ナディア

ザナ ナディアのメイド

ミス・フィップス ナディアの秘書

ザルガー国、エミリー大公妃

ザルガー国、ケリー王子

クリッシュ元帥（将軍）

サビアン・パスタツル

第一幕

第一場 パリにあるナディアのアパートの一室

第二場 第一場と同じ、数時間後

第二幕

クライアー国、王室宮殿におけるナディアの個人邸宅、
年後

第三幕

第一場 第二幕と同じ

第二場 第一場と同じ、数時間後

第一幕

第一場

（パリのアパートの一室。狭いが高価な家具が設（じつら）えられている。幕が上がる。舞台は無人。午前五時ごろ。）
（明けがたに近く、光がすでによろいどの間から、薄く射し

込んでいる。話声が近づき、ドアを開ける（鍵の）音がする。ナディヤとサビアンが入ってくる。二人とも少しへばっている様子。ナディヤはとびぬけて美人。着ているドレスはともシヤレたもの。やや派手か。サビアンは夜会用に正装しているが、ネクタイはしわになり、髪はひどく乱れている。ナディヤが部屋の明り（電灯）をつけ、そでなしの外套をなげ捨てる。）

ナディヤ　なんてパーティーかしら。私もうくたくた。死んじゃいそう。（あくびで言葉がとぎれる。）

サビアン　けだものの目だな、あの電気の光、こいつは駄目だ。外はもう明るい・・・ブラインドを上げて、外を見よう。

ナディヤ　待って、おしろいをつけてから。（顔におしろいをはたき、口紅をつける。サビアン、ブラインドを上げ、窓と鏡戸を開ける。）

サビアン　ほら、この方がいいだろう？

ナディヤ（瞬きながら。）ええ、素敵。でも、似合わないわね、この景色、私には。

サビアン（少しおどけて笑いながら。）自然には咲かない・・・異国趣味の・・・カトレアだからね、きみは。自然にはない・・・異国趣味の・・・

ナディヤ　ねえ、サビアン、あなた、まだ少し酔っぱらっているんじゃない？

サビアン　はっはっ、「冗談じゃない。」

ナディヤ（くすくす笑いながら。）そうよ、あなたまだ酔っ

てるのよ・・・

サビアン　それは疲れてはいるさ、たしかにね・・・でも、頭の方はしっかりしてるよ。

ナディヤ（また、くすくす笑いながら。）今夜は、笑っちゃったわね私、大笑い・・・ジュリーの、あのひどいドレス。まる一年間、每晚あれを着て寝ましたっていう服ね、あれ。

サビアン（一緒にあって、くすくす笑いながら。）うん、最高だったね、あれは。ありや全く・・・最高だった！

ナディヤ　それに、聞いた、あれ、あの人の歌った *Home time*。まるでキリス・ノルマン気取り。（ナディヤはシャペンとひどい疲れ、それに笑いがとまらない。体を前後にふらふらさせながら、窓の方に進む。）

サビアン　ひどかった・・・その一言だね、あれは！

ナディヤ（窓の所で。）早朝のパリって、本当に新鮮で、2清潔だわ。

サビアン　おそろしいくらいにね。（窓に近づき彼女とならぶ。）

ナディヤ　処女みたいに。

サビアン　処女、それはないだろう。

ナディヤ　もちろん、処女よ。あなたには分らないの。

サビアン　処女ね、素敵な考えだよ、全く。

ナディヤ　私がパリをほめるとすぐからかうのね。ひどいひと。

サビアン　僕もパリは大好きさ。だって、パリなんだからね、きみと出会ったのは。

ナディヤ　ありがとっ、サビアン。そのいい方、優しいわ。

サビアン 畜生！

ナディアヤ どうしたの？

サビアン ごめん、あまり幸せだと変になることがあるんだ、君は？

ナディアヤ あ、あそこに、市場にいく荷車！

サビアン 僕はよく、きみへの僕のこの感情、そのうちのどれくらいが肉体の愛で、どれだけが精神の愛か、何時間も考えることがあるんだ。難しいね、この問題は。

ナディアヤ 荷車を馬がひっぱってる。退屈そう！

サビアン 精神的愛は永遠に続く、だけど肉体的な愛は続かない、そう言うからね。

ナディアヤ 私、エッフェル塔大好き、どうしてみんな好きじゃないのかしら。ユーージェニー皇后陛下、あの方でさえ、お好きじゃないなんて。

サビアン ねえ、続かないって、思う？

ナディアヤ 続かないって、何が？

サビアン 僕の話きこえてるんだろ？、ナディアヤ。僕は、肉体的な愛は続かない、って言ったんだ。ユーージェニー皇后陛下の話はどうでもいい。君、どう思う？

ナディアヤ 変わらないものはないのよ。だからだわ、人生がこんなに空っぽで、何かの冗談みたいに見えるのは。

サビアン やめてくれ、そんな言い方。

ナディアヤ どうして？

サビアン 不真面目だよ。

ナディアヤ 続くだの、続かないだの、そんな話、始めるからいけないの。時間の無駄だわ。時間って、大事ななのよ。

サビアン 僕らには、悠久の時間がある。

ナディアヤ 悠久？

サビアン きみが僕に、愛想をつかさなければね。

ナディアヤ 馬鹿なこと。

サビアン 馬鹿じゃない。きみは僕に愛想をつかさかもしれないんだ。気が変わりやすいたちだからね、きみは。

ナディアヤ やめて、そんなことを言うのは。

サビアン 今夜は、きみ、エリーズにずいぶん、あたっていたね。

ナディアヤ だってあの子しつこいんだもの。

サビアン しつこいとはひどいね。

ナディアヤ あの子のあたまって、へちまよ、きつと。

サビアン 頭ごなしだな、まるで権柄づくた。

ナディアヤ（体ごと後ろむきになって）やめて、サビアン。3
そんな言い方。

サビアン あらあらあら、ナディアヤ、ナディアヤ、ナディアヤ、どうしたんだい。

ナディアヤ コーヒー、のむ？ いれてきましょうか？

サビアン うん。手伝うよ。

ナディアヤ いいえ。だって、あなたって何でもやり過ぎ。

結局、大騒ぎになっちゃうんだから。ここにいて、朝日でも拝んでてちょうだい。すぐもどってくるから。（立ち上がる。

訳註 ここまでのどこかで二人、窓辺から移動して坐っている。）

サビアン（彼も立ち上がり、窓を背にして寄りかかりながら。）もし、今僕がここから身投げしたら、大変かな？

ナディアヤ ええ、大変よ、それに馬鹿なこと。(ナディアヤ、上衣を取り、出ていく。)

サビアン (彼女がまだそこにいると思って。) 僕には自殺はできないな。そんな勇氣はない、何が起こったとしても。一体どんな感じがするんだろう、全てが止まるまさにその一瞬には。感じなんてないんだろうな、全く、何も。でも・・・(振り返って) あれ? なんだ、いないのか! (ナディアヤが部屋に戻ってくる。)

ナディアヤ なにか言ってた?

サビアン きみがまだ部屋にいますかと思っていてね。結局、長い独白か。自殺についてね。

ナディアヤ まあ、面白そう!

サビアン (思いにふける様子で。) 考えると面白いんだよ・・・死後の世界って、あるのか、ないのか。あるとすれば、それは一体どんな所なのか。

ナディアヤ 私が気掛かりなのはこの世、それどまり。それより先の世は考えない。

サビアン それより先の世を考えないんじゃないんだ、きみのは。先のはまるで考えないんだ。今日一日を生きる、まるで、蝶々のように、気ままに・・・

ナディアヤ 私を物にたとえるのはやめて。さつきはカトレア、今は蝶。どっちでもないのよ、私は。

サビアン ちょっとちょっと、僕にどならないで。きみってこわいね、怒らせると。

ナディアヤ (笑いながら。) 私には先のことなんて考えられないの、だって、今が一番幸せで満ち足りた瞬間なんだから。

サビアン うん、そうこなくっちゃ! (あくびがでる。)

ああ、眠くなってきた。
ナディアヤ さ、すわって。もう、ぶつぶつ言わないの。ザナが起きちゃうわよ。私、コーヒーをのせてくるから。

サビアン のせるって、何だい?

ナディアヤ ガスレンジの上によ、勿論。(ナディアヤ、出ていく。サビアン、漆塗りの箱から煙草を一本取り出し火をつけ、寝椅子に寝転ぶ。足を上にあげて、低い調子で鼻うたを歌う。ナディアヤが二組のカップとソーサー、それに砂糖入れをのせたトレイをもって、戻ってくる。) ザナったら、どうせまたコーヒーって言われると思つたのね。すっかり支度ができていたわ、後はただガスの火をつければいいように。

サビアン あと三日か・・・素敵だなあ。

ナディアヤ (彼を見下ろしながら。) ええ。

サビアン キスして。

ナディアヤ どうして?

サビアン 僕を愛してるんだろっ?

ナディアヤ ずいぶんありふれた理由。(屈みこんで彼にキスする) はい!(サビアン、ナディアヤを抱きしめて押したおす。) いや、ねえ。やめて、しつこくしないで!(もがいて身を引き離す。)

サビアン 二度目の結婚、楽しみ?

ナディアヤ ええ、最初の結婚が涙が出るほど、大成功だったから。

サビアン アレックスとは違つはずだよ、僕は。

ナディアヤ それは違つでしょう。あんなひどい人はいるは

がない！ 私、そう自分に言いきかせて、自分をなくさめてきたの。

サビアン 君があいつのことをがまんしていたってというのが、僕には不思議だよ。

ナディアヤ 不思議でも何でもいいの、もうやめて。不愉快な過去をこんな時に思い出すなんて馬鹿なことだわ。(左手でサビアンの髪をさすりながら、右手で煙草を一本とる。)

サビアン きみは最高だよ。(マッチをすって、火を差し出す。)

ナディアヤ ありがとう。

サビアン (もう一度、満足げに寝椅子に背をもたせ) 愛してるよ、きみのこと・・・とても、愛してる。

ナディアヤ ありがとう、サビアン。

サビアン さあ、今度はきみの番。

ナディアヤ (なにげなく、ほつれた髪をピンでとめて。) 愛してるわ、あなたのこと・・・とても、愛してる。(ピンは予め女の髪の毛に数本ささっている。)

サビアン ありがとう。

ナディアヤ (もの思わしげに。) でも、どっしてかしら・・・サビアン (笑いながら。) それは、僕が完璧な容姿の持ち主で、しかも男としての美德は全て備えているからさ。

ナディアヤ (真面目に。) そうじゃないの。私が言いたかったのはどっしてこんな幸せが、私にめぐってきたのかって・・・今になって、私はそんな幸せに値しないの。

サビアン (感情を込めずに。) いや、きみはどんな幸せにだって値するよ、あの三年間、アレックスという男に耐えた

じゃないか、その代償だ。

ナディアヤ 違っわ、逆よ。あの時から・・・私は何の幸せにも値しない女になった。馬鹿で浅はかで、安っぽい女になったの。

サビアン さあ、もうお願いだから、自己嫌悪はやめるんだ。悪い癖だよ、それは。特にパーティーの後でやるんだからね、君は。

ナディアヤ そうね、パーティーの後はいつも・・・駄目なの、私。

サビアン まあ、たいてい誰でもそうだけど。

ナディアヤ 私って馬鹿で安っぽい女、こんな簡単な言い方ですむのは私たちの間でだけね。だって、私たち二人とも他の人から見たらとんでもなく自由な価値観を持つてるんだわ。

だから、本当に上流の社会、ちゃんとした人たちに私がどう見えるか、それははっきりしている。そう、私なんて言語道断の極悪人ね。

サビアン (笑いながら。) 言語道断はよかったね。

ナディアヤ ああ、サビアン、からかわないで！ ねえ、私、本当に後悔してるんだから。

サビアン 何を？

ナディアヤ アレックスが死んでから今日までの私の生活。

サビアン そんな無茶苦茶な言い方はないよ、それじゃまるで・・・ (僕が君と知り合ったことも・・・)

ナディアヤ まるで？

サビアン わかった、わかった。

ナディアヤ あなたってほんとに不思議。私のあんな過去を

知って、それが素敵だと思つたなんて。

サビアン きみの過去！ それが一体、何だつていうんだ。僕に未来がある限り、そんなもの。

ナディア その台詞、どこかで読んだことあるわ。

サビアン 勿論あるさ。恋愛小説たる！ ねえ、ナディア、どんなに皮肉屋で醒めきつたような人達でも、誰かを恋するようになったが最後、まるでそれまでの皮肉屋が嘘みたいにくら、ロマンティックで真摯な態度になるんだ。

ナディア 本当の皮肉屋になんて、なれっこないのよ。正しい心の持主なら。

サビアン (興奮して。) でも、僕の恋は本物だよ、ナディア！ 今まさに僕の心は、君への恋であふれそうさ。君への恋だけでね。 きみのために何かしたいんだ、素晴らしいことを・・・

ナディア ええ。

サビアン 戦つよ、君のために！

ナディア 素敵！

サビアン 馬で君を連れ去る！

ナディア (きつぱりと。) 駄目。

サビアン オーケー、馬はやめだ！

ナディア (笑いながら。) おかしな人。

サビアン どうも、やる気がそがれるなあ・・・僕は本気で、きみを守る理想の騎士、勇壮をきわめた英雄になれたらつて。 きみのためなら死んだつて・・・

ナディア そんなこと言わないで、それこそ馬鹿げてるわ。

サビアン いや、本気で、そう思ってるんだ。

ナディア (立ち上がりながら。) とにかく、台所みてるわ、コーヒーが吹きこぼれて、きつと水びたしよ。(彼女は出ていく。サビアンは寝椅子に寝転び、クッションに顔を埋める。ナディアがコーヒーポットを持って、入ってくる。)

焦げてないと、いいんだけど。(コーヒーをつぐ)

サビアン (顔をクッションに埋めたまま、話す。) うむうむ、うむうむ・・・

ナディア なあに？

サビアン (起き直つて。) たぶん焦げてるだろうなつて。

ナディア ねえ、飲んでみて。

サビアン (カップを取つて。) きみも飲むんだ、同時に。

ナディア ええ、いいわ、ちょっと待って、(テーブルから彼女のカップを取つて。) はい。(二人、同時に飲む。ほつと、安堵の溜息。) よかった、焦げてない。

サビアン うん、うまい。 とこるで、明日はどうするつもり？

ナディア あしたつて、今日のこと？

サビアン そうか・・・そう、今日のこと。

ナディア 昼食の時間まで眠つて、それから車であなただを迎えに行くわ。お昼は軽く、ラブルースでごく軽く済ませましよう。その後、ブローニーニユの森を少しドライブして、それから私はドレスを合わせに行かなくちゃね。

サビアン 衣装合わせは、絶対、欠かせないね。

ナディア それから、戻ってきて、「ルイーズ(芝居)」をちゃんと楽しめる気分になるまで休むね。私「ルイーズ」って大好き。 あなたの腕をしつかりつかんで、嬉し泣きをする

の。おかげであとは夕方まで私の顔きつとひどいわ。

サビアン そう、それで、僕たちの結婚がまた一日分、近づくんた。

ナディヤ ええ、一日分、近づくのね。

サビアン もう一度、自分の国へ帰りたいかい、クライアーに？ 僕たちが、結婚した後。

ナディヤ たぶん・・・いつかはね。クライアーでは、私、不幸せだった。でも、あなたと一緒になら、どんな悲しい思い出にも、笑って向き合えると思うわ。それに、とても美しい国なの。

サビアン 素敵なところらしいね、きみの話によると、何処もかしこも。僕も見たいいな。

ナディヤ 丘は、非の打ちどころがなく、森は、イギリスの春の森のよう、釣り鐘草や桜草の花が咲いていて。それに陽気で楽しい人たち。いつも変わった不思議な服をきて・・・小さな村では特に・・・明るい色の服をきて、厚手でおかしな靴をはいていた。私、ターニヤ伯母さんとよくドライブしたの、するとみんなで喝采して、おじぎをしてくれて、車の中に花を投げてくれたわ。

サビアン ターニヤ伯母さんって、女王様だった人？

ナディヤ ええ、そう。 あともう少し、生きていてくれたら、何もかも違っていたでしょうね。

サビアン アレックスとは結婚しなかった、ということ？

ナディヤ そう。 伯母が生きていてくれたら、義理の母も私にあの結婚を無理強いできなかったわね、きつと。 私もはつきりいやだと言ってたでしょうし。 ターニヤ伯母さんは私

をととても気に入ってくれていたわ。何もかも、ずつといい方へ変わっていたわ。私はどこかの育ちのいい若い男性と結婚して、程々に退屈な社交生活を送っていたでしょうね。子供でもいれば退屈することもないし、つらい思いをすることもなかったはず・・・そして、それを乗り越えて、そう、こんな風にここにいることも。

サビアン ああ、僕は嬉しいよ、きみがつらい経験をしたこと。君がそれを乗り越えたことが。

ナディヤ そう、私も嬉しいわ、今となっては。

サビアン きみには、礼儀作法に厳しい奥方にはなつて欲しくないな。だって、きみには王家の血が流れていて、いつだって自然に、僕の方がきみの言葉に従うことになるんだからね！

ナディヤ 私は自分の国を捨ててしまったの・・・いえ、7私の方が見捨てられた、そう考えるべきね、少なくとも私は。だから、もう長いことクライアーのことは聞いていないわ。クリツシュからも、もう殆ど手紙が来ないし。

サビアン クリツシュ？

ナディヤ 彼のことは前に話したわ。私の一番のお友だち、子供の頃からの。そう、今でも。どんなに久しく離れていても、こうした友情には変わりがないものでしょう。クライアーでは、彼だけなの、アレックスが本当はどんな男か知っているのは。

サビアン それで、彼が連絡役をしてくれていたんだね？

ナディヤ ええ、つい最近までは。 たぶん、もうすぐまた、彼から知らせがあると思う。

サビアン 彼の他には誰も、アレックスの仕打ちを知っていた者はいないのかい？

ナディアヤ 彼の家族と義理の母だけは。でも、知らないふりをしていたわ。

サビアン あったことを全部、僕に話すんだ。

ナディアヤ (笑いながら。) こわい顔しないで、サビアン。それはもう、心の奥にしまいこんじやったの、永久に(絶対)に)。

サビアン 話をつづけて、聞いているから。

ナディアヤ コーヒーも少し、いかが？

サビアン 話してくれ、あいつの仕打ちがどんなにひどいものだったか、きみがどんな扱いを受けたのか・・・聞けば、僕の心は同情に猛(たけ)り狂い、きみに接吻し、あの幽霊どもを地の果てまで追い払わずにはいられないだろうけど。

ナディアヤ ついてなかったの、最初から、何もかもうまく行かなかったわ。

サビアン いいぞ。なかなかいい出だしだ！

ナディアヤ (大げさに。) 生まれた日に、運命の女神が、汚い指で、印を付けていたのね、ちゃんと。

サビアン ちょっと、わざとらしいけど。

ナディアヤ 洗礼の日には、乗合いバス一台分も、悪い妖精たちが押し寄せたんだわ。

サビアン いいぞ・・・

ナディアヤ それから、あの結婚式！ ああ、サビアン、あの結婚式を見たら、あなた笑い転げてたわ。国中、到るところで大騒ぎ。勿論、お役所も会社も商店もみんなお休み。子

供たちの花戦争、夜には松明の行列。全てが準備万端、整っていた、クライアーの習慣どおりに。アレックスに会ったのは三回だけだったわ。到るところに、私の顔、顔、顔。子供のビスケットの箱から流し目を送っている私、掲示板からじろつと見下ろしている私。ひどいのは、私の藪睨みの顔。

サビアン 食欲がなくなっちゃうね。

ナディアヤ もう気にもしていなかった、通り越していたのね、自分の顔なら鏡でいつもみていたから。私、自分が酷い目にあつた話するのなんて平ちゃら、何時間やっただけいいわ。でも、ウエディングドレスの話だけは、別。王家伝来の宝飾品で飾り立てられて、私、まるでクリスマスツリー。それとも色ガラスでできたチヨコレート入れ。動きも何もできやしない。誰かが頭のところを捻れば、首のあたりで銀紙に包まれたチヨコレートがでてくる。

サビアン かわいそうに。

ナディアヤ でもね、私とても人気があつたのよ、サビアン。愛されていたの。今はきつと違うわね。私、随分変わったから。

サビアン ありがたいことに。

ナディアヤ アレックスも素晴らしい人気があった。背が高く、見るからに軍人、美男子。もてる条件は、全て備えていたの。私たち、ハネムーンは、登山だった。

サビアン で、きみは愛されていなかった。

ナディアヤ ええそう、まるで。でも、そんなこと問題じゃなかったのよ、誰にとつても。愛なんかどうでもよかったの。

サビアン そりゃそうだろうね。

ナディヤ 私たちが初めて一緒に晚餐をとった夜、アレックスが泥酔。おかげで私もさんざん。きつと酷い状態だったでしょうね、外から見たら。彼、こっこ遊びを始めたの・・・それも陰惨なこっこ遊び。私はあの人の奴隷か何かの役。あの人を怖がって部屋中逃げまわらなきゃいけなかったの。それを私、走ってやらなかった。本当は怖くてしようがなかったのに、ただゲラゲラと笑ってやったの。それが、あの人にはしゃくだったのね。当り前のことだけ。だって私がわめきながら逃げ回る姿が見たかったんだもの。それが失敗。だから今度は、幽霊とか人殺しとか、そんな怖い話を始めて、私を怯えさせようとしたわ。でも、私の心はとくに怯えていたわ。その前のこっこ遊びで。そして、ただただ笑ってやったの。ゲラゲラゲラゲラ。馬鹿みたいに。

サビアン なんて奴だ。

ナディヤ 天国のようなハネムーンの後には、ロデッルの城に戻って、そこで披露宴。大勢、皇族や貴族の方を招待して。ああいう席では全てが型通り、お行儀よくしてなくちゃいけないでしょ？ いやでたまらなかったわ。アレックスの女あそばは、それまでもずっと続いていて、お相手の何人かはそれ相当の身分の女だったから、会わなきゃならなかったの、アレックスの言いつけで。あの人たち、陰でいつも私を軽蔑していたわ、私が何も知らないと思って。

サビアン でも、まわりはきつと、気が付いていたんだらう？

ナディヤ 気が付いていたでしょうね、たぶん。でもアレックスはハンサムで、スポーツマンだったから、もてるのは当

然って。

サビアン なるほど。

ナディヤ（ゆっくりと。）そうね、予感はしていたわ。何が、いつかきつと自分の身にふりかかるとは思わなかった。私って何か悪いことを予感する能力があるの。いやだわ、こんな能力、陰気になるだけ。

サビアン 馬鹿な話はよすんだ。きみに今、予感があるとすれば、それは幸せだ。幸せの予感だ。それも完璧なね。受け合うよ。

ナディヤ そうかしら。

サビアン 大丈夫、心配するだけ損さ。

ナディヤ さっき話しながら、少し寒気がしたの、ここはこんなに暖かで安全だっていうのに。お日様もちょうど出てきたわね。でも、さっき話してるとき、ちょっと。

サビアン 風邪かい。

ナディヤ（笑いながら。）いえ、そういうのじゃないの。

サビアン やっぱ、クライアーへ行くのはよそう。結婚しても。きみを悲しませるだけだろうから。

ナディヤ（視線を落として。）そうね、悲しくなるわ、きつと。でも、いつかは行かなくなっちゃ。だって、私が生まれたところなんですもの、それに・・・そうね、クライアーは私の体の一部・・・いいえ、私の方があの国の一部かもしれない。とにかくそんな気がするの。

サビアン いま、思いついたんだけど、

ナディヤ 何を？

サビアン 例の計画を実行するのさ、予定通り行くこうが行

くまいが。ランチの後でブローニーの森をドライブする、あれはやめにしよう。結婚するのさ、今すぐ。

ナディア 無理よそんなの、何も準備してないんですもの。

サビアン 何もいらなんだよ。きみと僕、それさえいいりやいいんだ。

ナディア 私たちだけでこっそり結婚したら、みんな怒るわ。だってみんな木曜日を楽しみにしているのよ、それにパーティも。

サビアン うーん、僕はちがつ、もうパーティはあきたよ。それにうじゃうじゃと取り巻いてくるあの連中にも。僕としては一刻も早く、静かに式を済ませて、きみと二人だけ出て行きたいんだ。

ナディア (急に。) わかったわ、結婚しましょう。でも、式には立会人が必要よ。

サビアン シュザン又頼もう、もちろん。

ナディア そうね。早いけど、起こしちゃいましょう。

サビアン それにモリッスだ。怒るだろうからな、あいつなしでやったら。

ナディア もうねるのは止めたわ、私。

サビアン 僕もだ。

ナディア 式が済んだら、そのまますぐ、ハネムーンね、説明は二人にまかせて。

サビアン それがいい。二人も喜んで引き受けてくれるさ。

ナディア 今日も素敵な日になりそうね。見て。(と外を指さす。)

サビアン 車が動きだしたね。

ナディア ええ、みんな、活動開始。

サビアン さあ、シュザン又を電話で起こそう。

ナディア まだ6時よ、無理じゃない？

サビアン 無理じゃないよ。誰かに言わなくちゃ、言うだけでもないよ、気が変になりそうだよ。

ナディア きつと、怒るわよ。シュザン又。

サビアン まっかになつてね。

ナディア じゃ、うまく頼んでね。

サビアン (電話を取って、テーブルの端に坐り。) もしもし……もしもし……エリゼー通り一八四五をお願いします。……そう、一八四五です。まだ熟睡中だぞ、きつと。彼女、電話は部屋にあるのかな？

ナディア そうよ、ベッドのそば。(面白がって。)

ナディア (そう、) 死ねほどびっくりするわよ。

サビアン 彼女、口を開けたまま眠るのかな？

ナディア 知らないわ、どうして？

サビアン おばさんがね、いつも口を開けて眠る人だったんだけど、急に誰かに起こされて、もう少しで舌を噛み切りそうになつちゃってさ。(笑う。)

ナディア あら、大変。(ナディアも笑う。)

サビアン 舌をかむって痛いんだよ、もうどうしようもなく痛いんだ。(

ナディア (笑いがとまらず。)

ナディア (もうやめて、お願い、サビアン。)

サビアン (手に持った受話器が揺れて。)

サビアン (手に力

がはいらない。

ナディアヤ（笑うのは。）やめて。シュザンヌ、怒っちゃわよ。

サビアン（興奮して。）あっ、彼女だ！ シュザンヌ、きみかい？（うなずく。）彼女だ。シュザンヌ！ 僕たち・・・（言葉がとぎれて笑いに変わる。）

ナディアヤ（気持ちを抑えようと努めながら。）かしてちょうだい、お願いだから。（サビアンの手から受話器をひたたくって。）もしもし、シュザンヌね。

サビアン 声の様子からすると、どうやら舌をかんじやつたみたいだぜ。

ナディアヤ ねえ、聞いて、シュザンヌ・・・私たち・・・（ナディアヤも言葉が続かず、笑いが抑えきれない。二人とも立ったまま、体をよじって笑う。）だめだわ、話せない。（受話器を置いて、崩れるように椅子に坐りこむ。）

サビアン（目を拭きながら。）もう二度と、僕たちとは口きいてくれないだろうね。

ナディアヤ 金輪際、だめでしょうね。怒らしちゃったわ。

私たち、一生、恨まれるわね。

サビアン 最高の友だちだったのに。

ナディアヤ 最悪ね。

サビアン 最悪だ。（二人、再度、笑う。電話のベルが鳴る。）

ナディアヤ あら、彼女よ、きつと。

サビアン カンカンに怒ってるぞ。どっちにする？ 説明するの。

ナディアヤ（まだ笑いながら。）私の方がよさそうね。（電話にでて）もしもし。はい、シュザンヌ・・・あー、お願い、そんなに怒らないで。違うのよ、ほんとに。（サビアンに）怒り狂ってるわ。（シュザンヌに。）あなたがひどく怒ってるって、サビアンに言っただけ・・・ええ、そう。だって、

歯がちがち鳴ってるのが聞こえるんですもの。ねえ、きいて。説明させてちょうだい・・・違うの、そうじゃないの。しらふよ、彼、酒なんて一滴も・・・あのね、とっても大事なことを知らせたかつたからなの・・・そう、すごく大事な話。私たち結婚することに決めたの、今日。木曜じゃなくて・・・そうよ、待てないの・・・そんな意地悪いわないで、シュザンヌ。ねえ、立会人になってくれない？ 衣裳なんか、全然。誰も見てやしないから・・・いいわよ、あのブルーの。モリッスもつかまらないかしら？・・・ええ、1

それでもいいわ。ラブルズに一時ね・・・いいわ。十一時までは行ってる・・・さよなら。（受話器を下ろす）いい人だわ、あの人。ああ、サビアン、夢じゃないわよね。サビアン 夢じゃないさ、今日なんだ。わかってたんだ僕には、木曜まで待てるわけがないって。

ナディアヤ（興奮して。）いま、何時？
サビアン 六時十五分すぎ。

ナディアヤ 私、ザナを起こさなくちゃ。必要な書類は、全部、ある？ 許可証とか何か。

サビアン うん、全部、揃ってる。ちよっともどってシャワーをあびてから、着替えてくるよ。

ナディアヤ ねえ、十二時には、ここに迎えにきてちょうだい

いね。買わなくちゃいけない物が少しあるの。

サビアン（両腕の中に彼女を抱き。）こつしていることが、おそらく世界中で一番、完璧な瞬間だろうね　きみと二人だけで、ここにこつしていることが。全てが今、ここから始まるのさ。僕らの新たな素晴らしい前途を祝して、乾杯しよう。

ナディヤ　大賛成！

サビアン　賛成なら、いいんだ。幸せな時には、その幸せを表わす行動が大切なんだ。お酒はどこ？

ナディヤ　とつてくるわ。隣の部屋から、グラスを二つお願い。（走り去る。）

サビアン　オーケー。（サビアン、部屋から出て、グラスを二つ持って、またすぐに戻ってくる。）

ナディヤ（舞台の外から。）ちよっときて、栓を抜いてちょうだい。（サビアン、出て行く。ほんの少し間をおいて、二人、シャンペンのボトルを持って入ってくる。）

サビアン　グラスはここ。

ナディヤ　私が注ぐ。やらせて。あなたは窓を開けてちょうだい。いっばいにね。

サビアン（窓を両側に開けながら。）さあ、一緒にここに立とう。陽が射して暖かな光の輪の中に。

ナディヤ　私たちの前途を祝して、乾杯。（手にしたグラスを掲げる。）

サビアン（同じくグラスを掲げて。）僕たちの前途に栄えあれ！　いつまでも、二人そろって。（ともにグラスを乾す。）太陽のやつ、雲に隠れちゃった。気がきかないやつだな。

ナディヤ（挑発的に。）そんなこと、どっちだっていいで

しょ。（床にグラスを放り出し、壊す。）

サビアン　そうさ、どっちだっていいさ。（彼も床にグラスを投げ、ナディヤを抱きしめる。）

（幕）

第一幕

第二場

（第一場と同じ、数時間後。幕が上がるとザナが部屋の片付けをしている。ナディヤの歌う声がバスルームから聞こえる。玄関で呼び鈴が鳴る。ザナが出て行き、扉を開く。クリッシュ将軍、登場。）

クリッシュ　あのお方はもうお目覚めだね。

ザナ　はい。

クリッシュ　すぐにお会いしなければならぬ　重要な

用件なのだ。

ザナ　お伝えします。

クリッシュ　私を覚えているね、ザナ。

ザナ　はい。

クリッシュ　変わらないな、ザナ、お前は。

ザナ　ええ。

クリッシュ　お元気でいらっしやるのだな？　あの方は。ずつとお幸せだったんだね？

ザナ　はい。（急に泣きだす。）

クリッシュ（すぐに。）どうしたんだ。なぜ、泣く？

ザナ（気持ちを取り直し。）すみません。私、とても怖いのです。あなた様が悪い報せをお持ちになったのではないか

と。クリッシュ 悪い報せ・・・いや。意外な報せというべきだな、これは。

ザナ（ためらいがちに）あの方は、今日ご結婚なさるので

クリッシュ 何だつて！

ザナ 二時に。

クリッシュ 結婚・・・結婚だつて！ 誰と？

ザナ パスタツル氏です。 サビアン・パスタツル。

クリッシュ サビアン・パスタツル！

ザナ お二人は今とても幸せなのです。 とても愛しあつておられます。

クリッシュ 私が来たと伝えて欲しい、ザナ。

ザナ 畏まりました。（ザナ、出て行く。クリッシュは窓のところにいき、外をみる。ザナ、戻る。）お会いになりません。今すぐ。

クリッシュ そうか。ありがとう。

（ザナ退場。クリッシュは写真たてを見る。サビアンの大きな写真あり。写真をよく見ようと腰をかがめる。ナディア登場。豪華な部屋着姿。不安のため、表情が固い。）

ナディア クリッシュ！ クリッシュ！

クリッシュ ナディア様。（ナディアの両手にキスする。）

ナディア 珍しいこと。何年ぶりかしら。来るってこと、何故知らせてくれなかったの？

クリッシュ 時間がありませんでした。

ナディア なぜ来たの？ 突然、こんな風に。何故？

クリッシュ お報せがあるのです。

ナディア クライアーからの？

クリッシュ はい。

ナディア クライアーからの報せなら、聞いても無駄ね私もう、忘れたの、クライアーは。

クリッシュ お忘れに？ クライアーのことを。

ナディア ええ。私のあそこでの生活は全て、永久に、消えてしまった。もう無いの・・・私、今日、結婚式・・・その人をとて愛している。ああ、そんな風に見ないで、クリッシュ。何なの？ 何があつたの？

クリッシュ 勇気を奮い起こして戴かなければ、ナディア様。過去に何度も、私の目の前でお示しになった、あの類（たぐい）稀なる勇気を。クライアーの血筋が絶える事態が生じたのです。もしあなた様がお戻りにならないければ、

ナディア 私が、戻る？ 何故。どういうこと？

クリッシュ 王様の弟君が、六カ月前にお亡くなりになりました。覚えておいでのことと思いますが。

ナディア ええ。あなたからの手紙にあつたわ。

クリッシュ 王様はスタイヤー国のマリア様とごく最近、ご結婚の予定でした。そうなれば、恐らくは後継者もでき、富裕なスタイヤーとクライアー、この二国間のきづなは堅固なものとなつていたでしょう。

ナディア それで？

クリッシュ その王が四日前、暗殺されたのです。

ナディア 暗殺！ マイケルが殺された！

クリッシュ はい。今までも、小さなもめごとはありまして・・・でも大したものではありませんでした・・・川下の

地方で暴徒が出たり、民衆によるデモが一、二度あつた程度です。いつの世でもその種のことをしでかす扇動家や革命家きどりの気遣いはいるものです。マイケル様は実際、民衆の人氣はなかつたのですが、我々はこの結婚で、そうした状況が変わるものと信じていたのです。それが、金曜の晩でした。ご夕食後、庭を歩いておられるところを待ち伏せされ、刺し殺されたのです。

ナディアヤ ああ、なんて酷いことを！

クリツシユ クライアーでは、サリー法が今も存続しているのです。従つて、次の王位継承者はナディアヤ様、あなた様です。

ナディアヤ クリツシユ、やめて！

クリツシユ あなた様が今では女王なのです。正式な王位継承権にもとづく。その事実は誰にも変えられません。

(やや間の後、ナディアヤ、少しヒステリックに笑う)

ナディアヤ だからあなたが来たのね。そう、わかっていたわ！ でも、大丈夫。大丈夫にきまつている。．．私、今考えた。今十分に考えて、結論が出たわ。私は女王にはなれません、クリツシユ。絶対に。だって私、死んでいるの。あなたがここに来て発見したこと、それは私が既に死んでいて、数週間が経つていたってこと。わかるでしょう？ とても簡単なこと。ね？

クリツシユ(頭を振りながら) 駄目です。

ナディアヤ 簡単なことよ。誰にも分かりはしない。私、今日、フランスを発つわ。イギリスかアメリカに。私を追おうとしても無駄よ。名前が変わるんだから。結婚して名前が

(胸が詰まって声がとぎれる。)

クリツシユ ナディアヤ様。いけません、それは。どうか、そんなことは．．．

ナディアヤ(狂暴に。) 見逃がして．．．私に行かせて！

クリツシユ ナディアヤ様。自制心を。どうか自制の心を！

ナディアヤ 自制心！ 自分の人生を、全て自制心のために捧げるって言つもの？

クリツシユ そうです。

ナディアヤ ああ、酷いわ．．．酷い。そうでしょう！ あなたには何かできたはずよ。

クリツシユ 私にできたこと！ ないです。ありません、そんなこと！

ナディアヤ(狂つたように。) 戻るくらいなら、死んだ方がいい、自殺します。分かるわね？ クリツシユ。お願いだから、どうか助けて、私の逃亡を。私にとつてそれがどんなに大切なことか、あなたには分からないかもしれない。いい？

何年も前、私は思ったの。もう決して幸せにはなれないだろうって。あの辛い、酷い結婚のお陰で、もう私は、何かに満足したり、喜んだり、そんな力はすっかり枯れてしまつた。それでも私、ずっと探し求めていた。はかない望みだと知りながら。そして遂に、今、この数週間のことだわ。探していたものが見つかったのは。それがサビアン！ この世の何よりも、誰よりも私を愛してくれている人！ 私も心から、気が狂いそうなほど愛している。他のことなんて、もうどうでもいい。生まれて初めて、自由とそして幸福を見つけたの。その自由と幸福を奪わないで！ 取り上げないで！(ナディ

ヤはむせび泣きを抑えられない。膝の上につづくまる。クリッ
シュは慰めるようにナディアヤの髪に手を当てる。それから自
分の脇にあるソファアの上にナディアヤの体を引き上げる。(

クリッシュ(優しく。)ナディアヤ様、どうか・・・実は、
一晩中旅を続けたせいで、疲労困憊(こんぱい)。空腹で倒
れそです。何か軽い朝食をザナに作って貰いたいのですが。

ナディアヤ あら、ごめんなさい・・・ええ勿論。ひどくお
腹がすいている筈ね。ザナ、ザナ、(両目を拭い、気持ち
取り直そうと努める。ザナ、再び登場。)

ザナ はい、マダム。

ナディアヤ 將軍に何か朝食を用意して・・・すぐに、出
るだけ早く。

ザナ 何をお召し上がりになりますか、將軍。

クリッシュ 何でも・・・何でも構わない。それとコーヒ
を少し。

ザナ では、オムレツを。

クリッシュ そいつはいい。オムレツで命拾いできそうだ。
ありがとう、ザナ。

(ザナ、出て行く。)

ナディアヤ 許して頂戴、クリッシュ、気がつかなくて、
それにあんなに取り乱したりして。でも、分かって頂戴、私
もひどく疲れていたの。タベ一晩、起きていて。

クリッシュ お気になされるには及びません、あなた様の
ことはよく存じております。

ナディアヤ 昔の私のことなら、そつね、でも、私とても変
わってしまったから、今では。

クリッシュ いえ、決してそんなことは。お変りになど、
なれる筈がないのです。

ナディアヤ 一生懸命、努力はしているの。気を静めて、現
実と向き合おうと。(声が途切れる。)でも、どうしても・・・

クリッシュ(ナディアヤの手をとって。)分かっております。

ナディアヤ どうすればいいの、私？

クリッシュ お泣きになるのです。気が晴れます。

ナディアヤ いいえ、その時間はないわ。落ち着いて考えな
ければ、二人で。何かいい手だてを。全てがまるく収まる、
何かいい手だてを。

クリッシュ 手だてなどありません、そんなものは、壁に
頭をぶっつけて行くようなものです。お諦めにならないれば。

ナディアヤ 私、普通の女になりたいの、ごくありふれた幸⁵

せが欲しいの。サビアンという恋人を持ち、その人から愛さ
れるという。どうして私には、自分の運命を決める権利がな
いの？ 他の人たちのように。ほんの少しも。

クリッシュ 運命を自分で決めるなんて、そんなことは誰
にもできません。他の誰にだって。

ナディアヤ あなたはそこに坐って、きつとこう思っている、
私が今に諦めるだろうと、そうでしょう？

クリッシュ はい、ナディアヤ様

ナディアヤ それは間違いだわ。私、諦めない。もし私がずつ
とクライアアに住んでいたとしたら、違っていたかもしれない
い。でも私はそうしなかった。だから全ては変わってしまった
の。あれは小さな国。あんな小さな国で何があったって、

それが何なの？ 結局。

クリツシユ それは大部分、あなた様ご自身にとつての問題なのです、あなた様が女王なのですから。

ナデイヤ（突然立ち上がった。）見て頂戴、私を。この私が立派な女王になれるかどうか。それこそ馬鹿げてるわ。この数カ月、毎晩、本当に毎晩、パーティー。中には酷いのがあつた。滅茶滅茶なパーティー。それに泥酔したわ、何度も。

そう、泥酔して、怒鳴つて。恋人もつくつたわ、他の女たちと同じように。去年はイタリア人、背の低い下卑た奴。その男とドーヴィルまで行つて、いつもの様に、ホテルやカジノで胸の悪くなるような馬鹿騒ぎ。持つてたお金、残らず使い果たしたわ。それで彼とは終り。その後がアメリカ人。ウエーブした髪、気のいい男。（笑う。）世界中のどんな男とでも付き合えるつて、最高。そう、私、死んだ夫の真似をしていんだわ、たぶん、意識せずに。神さま、彼の魂をお救い下さい。彼ならぎつと、あの頃の私よりも、今の私の方がずっと好きだつて言うでしょうね。理解してよくつき合うべきなのよ。よく思つわ、私、アレックスを少し誤解していたかもしれないつて、私の頭がもう少しまともだったら、私たちが結構楽しくやれたんじゃないかつて。かわいそうな人。

クリツシユ 彼はただのつまらない自由主義者です。

ナデイヤ そうね、勿論。自由主義者、彼にびつたりの形容。何でも自由にしたい放題、素敵な言葉だわ。私も今ではあのと同じ自由主義者。パリの生活は、ほんとに素晴しかつたわ。そこで出会つた人達はただ、上流社会から認められていないというだけ。みな、人生の出だしは申し分なかつたのに、途中でつき飛ばされてどぶに落ちちゃつたのね。ある者

は麻薬に、ある者は酒に、またある者は混じりつけのなしの恋におぼれる。ああ、とつても愉快だつたわ。エリートのための学校をいい成績で卒業したつていう感じ。人生に必要な知恵を学んだわ。支配と威厳に満ちた王室とは・・・（何の関係もない・・・）（急に言葉を切つて。）ああ、まるで滑稽でしょう？ こんな無意味なことつてあるかしら？ 私が女王に？ お笑いくさだわ、クリツシユ、奇想天外な茶番よ。一国の君主に、神聖な王位に、女王の席に、私がつく？ ああ、だめ、だめよ、絶対に、だめ！（ナデイヤ、まだ笑いながら、顔をそむける。手の甲で目をぬぐつ。）

クリツシユ 私は（今まで一度も）あなた様に欺かれたことはありません。あなた様は、自分を偽らないお方です。

ナデイヤ（激しい口調で。）でも、今の話は全てあつたこと、事実なの。私がしたことなの。あなたを失望させるために仕組んだ芝居だつても思つたの？ ほんとの話なのよ。

クリツシユ 分かつております、一言の嘘もないと。

ナデイヤ それなら分かるはずだわ、私なんて完璧に問題外だということが。金輪際、クライアーの王冠を戴くには、ふさわしくない女だと・・・

クリツシユ クライアーには、あなた様の過去ではなく、未来が必要なのです。

ナデイヤ（感情を高ぶらせて。）やめて、やめて、やめて。サビアンも同じことを言つたわ。ついさつき。

クリツシユ サビアンは犠牲にしななければいけません。

ナデイヤ 「冗談じゃないわ、「サビアンは犠牲にしななければいけません」、まるで血の通つていない傍観者の台詞。そ

それが私にとってどういふことか、分かつて言つてゐるの？　そこにそう突つ立つて、そんなたわ言をよくも言えたものね。「サビアンは犠牲にしなければいけません」。「犠牲に」。ああ、クリツシュ、どうしてもつと融通がきかないの。どうして私の立場で物を見よう、落ち着いて答えを出そう、としてくれないの。どこかに抜け道があるかもしれないわ、私たちが、見つける努力さえすれば。

クリツシュ（自分の隣りにナディアを引き寄せながら、坐る。）なら、ここへどうぞ、一つ考えましよう。何かお考えが、おありですか？

ナディア 最初に言つた通りよ。あなたがここに来て発見したこと、それは私が既に死んでいて、数週間が経つていたということ。

クリツシュ すぐに嘘だということがばれます。クライアーから新聞記者が真つ先に調査にきて。

ナディア もしあなたが来たときに、私とサビアンがすでに結婚していたら、どうなつていたかしら？

クリツシュ 結婚が無効であつたということにします。

ナディア なぜ彼が、私と一緒に、クライアーを統治するということではいけないのかしら？

クリツシュ まず第一に、国民が我慢できないでしょう、たとえわずかの間でも。議会と外国の諸候も認めるはずがありません。

ナディア もし私がここに坐つて、怒りや恨みの感情からではなく、嫌だと言つたら・・・ただ嫌だと、はっきり言い続けたら、どうします。

クリツシュ あなた様に、それはできません。

ナディア 本気でそう、信じているの。

クリツシュ はい、そうです。王室にお生まれになつたあなた様は、籠の中の小鳥なのです。それは、どれ程うまくその困いが木々や山やパリの屋並みで隠されていようと、いつでもそこにあつて、あなた様を取り巻いておられるのです。国家という籠が先にあつたのです。サビアンよりも前から、愛や幸福よりもつと前から。それは、あなた様の自由になることではないのです。

ナディア 外の世界は、自由と平等に満ちているのに。

クリツシュ いえ、世間に満ちているのは貧しい者たちの罵声です。既成の序列に反抗し、隙あらば王や女王や皇族たちを伐り殺して、王冠をかすめ取り、だらしない格好のまゝ、玉座に足をかけようとする者たちの叫び声です。（ザナ、イ朝食用のトレイを持って登場。トレイを小さなテーブルに置いてから、そのテーブルごと將軍の方へ運ぶ。）ありがとう、ザナ、ああ、ちょうどいい具合だ。

ザナ コーヒーならまだございますので、そう仰つて下さい、將軍。

クリツシュ ありがとう。

（ザナ、退場。クリツシュは満足そうに朝食にとりかかる。）
ナディア 一体、私なんかが役に立つだらうか、女王として。望みも情熱も愛国心さえも持たない私のよつな者が。

クリツシュ 愛国心は生まれるものです、自分の内に。世の中のありとあらゆる不遇や辛酸も、決して愛国心を消し去ることはできません、もしそれが生まれながらに備わつた愛

国心であるなら。

ナディアヤ 今の台詞、とても素敵ね、でも本当に、そう、信じているの？

クリツシュ そう、確信しています。

ナディアヤ 私の中で、愛国心がいずれば大きく成長し、それが健全に正しく民を治める役に立ち、結果として最善に通じるものと、そう、信じているのね？

クリツシュ はい。同時に、あなた様には戦わなければならぬ多くの敵も生じるでしょう。先程、お話し致しました通り、至る処に、革命を起こそうと企む、無政府主義者がいるのです。

ナディアヤ 私も暗殺されるかもしれないわね。そうなら可笑しいわね、あなたが、一番の貧乏くじよ。

クリツシュ（あつさり）可笑しいですね、全く。

ナディアヤ 何時の列車なのかしら？

クリツシュ 十二時、正午です。

ナディアヤ（呼ぶ）ザナ、ザナ、

ザナ（登場）はい、ご用は？

ナディアヤ できるだけ急いで、荷物をまとめてちょうだい、ザナ、クライアーに戻ります。

ザナ（気持ちを抑えようと唇をかみながら）クライアーへ？

ナディアヤ ええ。私と一緒に来てくれるかしら、ザナ。

ザナ はい、ナディアヤ様。

ナディアヤ もしこのままバリにとどまりたいのなら、それでもいいのよ。

ザナ（息を詰まらせながら）いいえ、私、ご一緒に参ります。

ナディアヤ（ザナに近づき）泣かないで。私たち、しなければならぬことが沢山あるでしょう。あなたの助けがますます必要になると思うの。

ザナ（気を落ち着けて）はい、畏まりました。

（ザナ、出ていく。ナディアヤ、机の方へ歩いて行き、その前に坐る）

ナディアヤ サビアンに、お別れの言葉をメモで残して置くわ。それから着替えをして。もうあまり時間がないものね。

クリツシュ 特別客室を用意してございます。万事、整っております。

ナディアヤ（椅子に坐ったまま、半分振り返り、クリツシュを見ながら）いつかもう一度、彼と会うことがあるかしら。

（幕）

第二幕

（一年後。クライアーのロデイルにある王宮の中にある女王の個人邸宅。部屋自体はとても簡素だが、家具は立派なものが設（しつら）えてある。舞台中央奥には、寝室に通じる扉。右手前にはザナの部屋と食事等の用意をする部屋に通じる扉。左手前には控えの間に通じる観音開きの扉。左手奥にはバルコニーに通じる大きなフレンチウインドウ。）

（幕が上ると、ミス・フィップスがバルコニーに立っている。真珠層のオペラグラスを目にあてている。）

ミス・フィップス ザナ、ザナ、早く・・・行列よ。馬車

が丁度門を通り抜けるところよ。

(ザナ、右手から登場。バルコニーに走って出る。)

ザナ まあ素敵。あの旗、旗!

ミス・フィップス お天気を持って、本当に運がよかったわ。

ザナ(夢中になって。)ほら、見て。あの方、ステップにたつて! 何て素敵なんでしょう。

ミス・フィップス 笑っていらっしやる。あの方、笑うことはない筈よ。

ザナ 將軍のせいよ、何か耳に囁いて。いつだって將軍、笑わせるんだから。

ミス・フィップス イギリスだったら、賓客は駅でお出迎える筈なのに。

ザナ 駅なんかより、この方がずっといいわ。

ミス・フィップス あ、出て来た。彼、背が高いわね。威厳もあるわ。

ザナ 公爵夫人もよ。ピツタリ公爵夫人という風貌ね。ザルガーの人達って、誰でもあんな感じ。

ミス・フィップス(興奮して。)あの方、公爵夫人にキスをして。あ、今度は彼の方があの方の手にキス。ほら、聴いて、あの歓声!

ザナ あの歓声なら大丈夫そう。ね? 暴動は起きそうにないわ。

ミス・フィップス そうね。有難いわ。ゆうべは怖かったわ。西門のところで喚いたり、銃を撃ったり・・・

ザナ あれは大したことなかったわ。

ミス・フィップス ほら、中へ入って行くところ・・・

(金切り声を上げる。)見て! 大変!

(銃声が一発。それから金切り声と叫び声。)

ザナ わあっ、大変! 撃ってる! 撃ってる!(自分の耳を塞いで、フレンチウインドウから部屋に飛び込む。)

ミス・フィップス いいえ、もう撃っていない。一発だけ。群衆に紛れて、誰かが。見て。まだ動揺が続いているわ。

ザナ あの方、大丈夫かしら。大丈夫かしら。

ミス・フィップス ええ、大丈夫のよう。弾(たま)はそれたわ。有難いことに。

ザナ(勇気を出して再びバルコニーに出て。)あの方、もうお入りに?

ミス・フィップス ええ、もつ中に。誰も怪我人はいなかった。ほら! みんなが国歌を歌い始めたわ。

(クライアーの国歌が聞こえてくる。群衆が加わってきて、だんだんと大きな歌声になる。)

ザナ(興奮して。)さあ、私達も歌いましょう。私達も、ここで歌うのよ。

(二人、国歌を歌う。音楽が静まるにつれて、二人も歌うのを止め、部屋に戻る。)

ミス・フィップス これでお祭りは終り。後は夜の部だけ。みんな、家に帰って行くわ。

ザナ 銃で狙うなんて! 獣(けだもの)! 無政府主義者なんだわ。

ミス・フィップス 本当に不愉快。ケリー王子の到着の時を丁度狙って。

ザナ あの人ハンサムね？ そう思わない？

ミス・フィップス よく見えなかった。だから判定は無理ね。

ザナ 私、嬉しいわ、あの方がハンサムで。写真丁度そのまま。あの方、きつとあの方のこと、好きになるわ。

ミス・フィップス こんなこと、あれこれと話すのはよくないわ。止めましょう。

ザナ どうして？ あの方、気にしないわ。

ミス・フィップス ザナ、もう「あの方」と呼ぶのは止めた方がいいわ。女王陛下なんですからね。

ザナ あなただだって言ったわ、さっきバルコニーで。「あの方、笑うことはない筈よ」って。

ミス・フィップス もう止しましょう、ザナ。

ザナ 私、物心ついてからずーっとあの方と一緒になの。パリのあの頃だつて。私が「あの方」と呼んでいるのはあの方も御存知の筈だわ。

ミス・フィップス（厳しく。）もういい。止めましょう、ザナ。私、手紙を書かなくちゃ。

ザナ 私もゆっくりしてはいられないわ。あの方、すぐにお帰りになるでしょうから。

（ザナ、部屋を飛び出す。ミス・フィップス、大声で「また！あの方！」。引きだしつきの大机に進み、手紙を（急を要するもの、普通のもの）分類し始める。王室の御仕着せを着た二人の小姓が、観音開きの扉をさつと開ける。ナディヤ、次いでクリツシュ將軍、登場。ナディヤは非常に美しい銀白色のドレスを着ている。ドレスには巨大な裳裾あり。頭に小

さなダイヤと銀の王冠。右手の椅子にぐったりと坐り込む。）

ナディヤ ああ、やっと終ったわ。神経がどうかなりそう。クリツシュ あの男は捕まりました。連行されるのを見ました。裁判にかけられて、死刑になるでしょう。

ナディヤ ああ、私、その事だけを言ってるんじゃないの。今日の事全て……神経がどうかなりそう。突然の銃声、それに金切声……にはだんだん慣れてきたけれど。（呼ぶ。）

ザナ……ザナ……

ザナ（登場。）お呼びでございますか？ マダム。ナディヤ ええ、ザナ。これを。（ナディヤ、王冠を外して渡す。）それと、何か冷たいものを。少し休みたいの。

ザナ はい、マダム。

（ザナ、王冠を受け取り、退場。ナディヤ、王冠の跡を消すように髪をなでつける。）

ミス・フィップス 何か御用はございませんか？ 陛下。ナディヤ ええ、ミス・フィップス。もう少ししたら、ケ

リー王子の部屋に電話をかけて下さい。（クリツシュに。）ねえクリツシュ、リンゴを取って下さらない？ その後ろのボウルにある……

（ミス・フィップス、控えの間に退場。クリツシュ、ボウルを手渡す。ナディヤ、リンゴを一つ取る。）

ナディヤ あなたも、いかが？

クリツシュ いえ、結構です。

ナディヤ（リンゴを齧りながら。）私、本当にヘトヘト。あの段の上で長い間立っていたせいね？ 焼け付くような陽射しの下で。

クリツシユ 実に落ちていらした・・・あの銃声の時
でも。

ナディアヤ（微笑む。）（他にどうしようもないでしょう？
悲鳴を上げて逃げるなんて出来ないし。）

クリツシユ ええ。でも、私の理想通りの陛下になつてい
らっしゃるのを見るのは大変嬉しいもので。

ナディアヤ 有難う、クリツシユ。今のその言葉、とても優
しいわ。

クリツシユ あの男が陛下を狙つて、撃とうとした瞬間、
後ろに立っていた男が気づき、そいつの腕を上に乗せ上げた
のです。

ナディアヤ まあ！ すごいわ、その人。

クリツシユ 彼には、今日の午後いつか、短い謁見を与え、
陛下から親しく感謝の言葉を・・・

ナディアヤ（あつさり。）（そうね。ひよつとするとその人
が本当の無政府主義者で、こちらをグサリと・・・

クリツシユ 謁見に際して、警戒は万全に・・・

ナディアヤ そんな怖い顔をしないで、クリツシユ。じゃ、
五時か五時半に寄越して頂戴。

クリツシユ ところで・・・ミス・フィップスの働きは如
何でしょう。

ナディアヤ あの人を私のおつきの人に雇つたのは、実に名
案だったわ。イギリス人の物の見方は、どこか気が休まるわ
ね。特に危険が身に迫つた時は。

クリツシユ すると、夕べは？ 彼女、脅（おび）えまし
たか？

ナディアヤ ええ。でも、危険のその最中にはおくびにもだ
さなかつた。済んでからね。

クリツシユ 素晴らしい！

ナディアヤ どうして？

クリツシユ いえ、その・・・どうだったかな、と。

ナディアヤ 全体ではどんな様子なの？ 何か変わった動きで
も？ 何か特別な？

クリツシユ ありません。事態は依然深刻です。革命に発
展するかどうかは、この数週間にかかっています。

ナディアヤ 数週間！ 数日でしょう？

クリツシユ この度の御結婚が、革命の阻止に働く筈です。

ケリー王子は大変魅力のある人のようです。あの方の馬車に
何人も女性から、花束が投げ込まれました。これは大変良
い徴候です。

ナディアヤ もし革命が起つたら、私は逃げなくちゃいけな
いのね？ この国を捨てて・・・

クリツシユ はい。しかし、その御心配はいりません。私
が・・・

ナディアヤ その時は、全てが無駄骨だったと分る時ね。惨
めね。

クリツシユ そのようなことにはなりません。

ナディアヤ どうかしら。

クリツシユ その方が宜しいのですか？

ナディアヤ いいえ、ただ自分自身にうんざりするでしょう
ね。こうなることは分っていたのにつて。

クリツシユ やがては全て軌道に乗る時が来ます。

ナディアヤ 全て？

クリツシユ（しっかりと。）はい。全てが。

ナディアヤ そうしていつも勇気づけてくれるのね、クリツシユ。あなたを見ているの、楽しいわ、私。

クリツシユ（微笑む。）光栄です。

ナディアヤ 私、あなたが今何を考えているんだろう、って思うことがしっつ中。だってあなた、いつだって平然と落ち着き払っているでしょう？ 愛する祖国が革命の瀬戸際で揺れている時でさえ。

クリツシユ 愛する祖国が革命の瀬戸際で揺れたことは、これまで何度もありましたので。今ではもう私も、さして驚かなくなつたのです。それに、この新しい陛下の下でなら大丈夫だという確信があります。

ナディアヤ 親切だわ、そんな風に言ってくれるなんて。でもその確信、根拠がないわ。だって私が原因なのよ、この悪い状況は。私の奔放な過去が……

クリツシユ 状況は陛下のいらっしやる以前から既に悪かつたのです。

ナディアヤ いいえ。これ程は酷くなかつた。私が王位にいたからなの、あの狂信家達が本当に怒り狂つたのは。私が過去にやつた馬鹿なことをいちいち調べあげ、おまけにやつていないことまででっち上げて、私に対する民衆の敵意を煽たのよ、連中は。そしてそれが効を奏している。そつでしう。

クリツシユ 今までは、です。これからは違います。陛下は民衆の人望がおありになるのです。連中の必死の扇動にも

拘らずです。

ナディアヤ 私、時々絶望してしまつたの。

クリツシユ 絶望はいけません。絶望からは何も生まれません。

ナディアヤ 一生懸命努力して、四方八方から叩かれて、事態は良くなるどころか、どんどん悪くなって……胸が苦しくなってくる……

クリツシユ 一年で事がすぐ好転するとは、思つていらっしやらなかつた筈です。短いですが、一年というのは。

ナディアヤ 短い！（微笑む。）この一年くらい長かつた一年が今までにあつたかしら。

クリツシユ 明日からはケリー王子が陛下を支えて下さる筈です。

ナディアヤ ええ。そうなれば嬉しいわ。

クリツシユ もつじきです。事は好転します。目に見えて。ナディアヤ あの人、この国のこつう事態をどう思つているのかしら。

クリツシユ 陛下に挨拶された時のあの微笑みから判断致しますと、大変お幸せそつにお見受け致しましたが。

ナディアヤ ええ、あの微笑み、よかつたわね。よい微笑み……でも、幸せな微笑みではない……とても親切な微笑み。

（机に身を凭（もた）せてその上のベルを鳴らす。）今電話で彼と話してみるわ。あなたはそこにいて。（ミス・フィッス登場。）ケリー王子に繋いで頂戴、ミス・フィッス。お話したいことがあると。

ミス・フィッス 畏まりました、陛下。（電話の方に行

く。)

ナディアヤ あの人の叔母さん、大公妃殿下には、ちょっとどきまぎしたわ。

クリツシュ 緊張なさることはありません。とてもお優しい方ですから。

ミス・フィップス(電話に。) もしもし・・・ケリー王子に繋いで下さい。至急です。

クリツシュ もうずっと以前から存じておりますが、小さな子供のように愛らしい方でした。

ナディアヤ 今でもそうね、きつと。あのお顔、それにあの帽子。

ミス・フィップス(電話に。) 女王陛下が、殿下とのお話をお望みですが・・・(ナディアヤに。) 殿下がお出になられます。(ミス・フィップス、立つて脇に外す。ナディアヤ、立上り、電話に進む。)

ナディアヤ(電話に。) もしもし・・・もしもし・・・殿下ですか？ 私です。・・・そのお部屋、お気に召して？

不都合な点などないといいますが・・・ああ、それは良かったです。・・・実は御相談があつて。私たち予定では、今夜の晩

餐会までもう公式にはお会いする機会がないので、もし宜しかったら今、こちらにいらして戴いて、少しお話が出来れば

と。お互いもっと打ち解けてお話す必要があると思ひますの。・・・あら、本当にお優しいこと・・・ええ、とても嬉しいですわ・・・(笑う。)

いえいえ、そんなことはきつとありませんわ。大公妃殿下も御一緒に如何でしょう。・・・

じゃ三人でお茶を。寛(くつろ)ぎましょう。(電話を切る。)

いらつしやるわ。あなたはここにいて殿下をお迎えして。私、このひどく重たい衣装、替えて来ます。

クリツシュ 畏まりました。(ナディアヤ、クリツシュに接吻の手を差し伸べて、寢室に退場。ミス・フィップスも扉の方に去りかける。)

待って、ミス・フィップス。お話ししたいことが。

ミス・フィップス 何でしょう、將軍。クリツシュ ちょっとお坐りになりませんか。(クリツシュ、椅子を差します。)

ミス・フィップス(坐つて。) 有難うございます。クリツシュ これからお話することは極秘です。宜しいです

ね。ミス・フィップス 分りました、將軍。クリツシュ あなたの御姉妹(きょうだい)の誰かが、今どこかで死にかけている、などということは万が一にもありませんね。

ミス・フィップス(驚いて。) ええ、ないと思ひます。ミュリエルは先週、とても元氣でした。火曜日にあの子の声を聞いた限りでは、これはどういふ事でしょう。ひよつとしてあの子に何か・・・私の知らないことで・・・

クリツシュ(慌てて。) いやいや、そつではなくて・・・ミス・フィップス あの子は身体は非常に丈夫なのに・・・

家中お多福風で寝込んだ時だつて、ミュリエルだけは・・・クリツシュ 落ち着いて、ミス・フィップス。あなたのお

妹さんの健康について、私が特別な情報を得ている訳ではありません。ただ妹さんの健康を口実に使うことは、多分可能

だと思つたので。

ミス・フィップス 口実！ 何の口実でしょう。

クリッシュ あなたが陛下のお側を……急に去りたいという時の。

ミス・フィップス お側を去る……何故、どういふ事です？ 分りませんわ。私に何か落度でも？

クリッシュ いや、あなたは立派に職務を果しておられる。實際陛下のお側にあなたのような、非常に信頼のおける、しっかりした人間がいるということは、心丈夫なのです。

ミス・フィップス 有難うございます、將軍。御親切にそんな風に……

クリッシュ しかしこの機会に、あなたには知らせておかなければならない。クライアーは現在、残念ながら、非常に危険な状態にある。

ミス・フィップス はい、將軍。

クリッシュ 女王陛下御自身、事態がここまで深刻だとはお気づきになつておられない。つまり、今や革命を阻止する手立てがない状況なのだ。もし明日の式典を何とか乗りきることが出来れば、チャンスはあるかもしれない。しかしそれも非常に心許（こころもと）ない。

ミス・フィップス つまり、革命の狼煙（のろし）は、今夜にも上るかもしれないと？

クリッシュ そう。

ミス・フィップス ああ、ひどく厄介な話……どうなるのかしら陛下やあなたは。それにケリー王子や他のみんなは。

クリッシュ あなたは英国人です。ですから、この国では

客人としての扱いが約束されています。多分車が一台あなたに与えられ、その車でああなたは真夜中までには国境を越えられるでしょう。

ミス・フィップス お言葉、感謝します。が、私やつぱり、ここに留まらせて戴きます。自分のことは自分で何とかやれますわ。それに私、お茶の後、沢山手紙を書かなければなりません。陛下に頼まれているのです。（立上る。）

クリッシュ（ミス・フィップスと握手をしてから。）有難う、ミス・フィップス。そう言つて下さるだらうとは思つていたのです。（ミス・フィップス退場。將軍、思わず微笑みかもれ、電話口に行く。電話を取り。）もしもし……もしも……ミルテ大尉に繋いで欲しい。……そう。……クリッシュだ。（間。）もしもし……君か、ミルテ。……24

そうだ。今日の午後陛下の命を救つた男は、見つかつたか。……何？……インベリアルホテルに待機中？……よし、五時に宮殿に来るよう手配してくれ。陛下が親しく感謝の言葉を述べる。……うん、私はまだここにいる。彼が着き次第ここに電話してくれ。（クリッシュ、電話を切り、右手の窓に近づく。二人の小姓が観音開きの扉をさつと開ける。）

小姓（登場を告げる。）ザルガー国、ケリー皇太子殿下。（ケリー王子登場。ザルガー国軽騎兵隊の大佐の軍服を着ている。）

クリッシュ 陛下より殿下をお出迎えするよう言い付かつております。陛下は只今軽装にお召し替えです。

ケリー（握手を交しながら。）ああ、それはいい。クリッシュ（シガレットケースを差しだして。）お煙草は

如何ですか？

ケリー（微笑みながら。）いや、また後で。

クリッシュ 暑いですね。

ケリー 全く。

クリッシュ ブリッジはなさいますか？

ケリー ええ、うまいものですよ。

クリッシュ それはいい。

ケリー 何故？

クリッシュ 機会があれば、殿下から陛下にご教示戴きた
いと。

ケリー それは大変楽しみです。

クリッシュ 何しろ陛下はトランプは全く駄目で。

ケリー ウーン、残念ですね。

クリッシュ 非常に残念です。

ケリー 陛下はオペラはお好きでしょうか。

クリッシュ 大変お好きです。

ケリー それはよかったです！

クリッシュ 但し、ファウストは駄目、例外です。

ケリー ごもつともです。

クリッシュ 歌はお歌いになりますか。

ケリー ええ、まあ、時々。

クリッシュ テノール？ それともバリトンですか。

ケリー その時の気分によりますね。

クリッシュ 成程。

ケリー 午前中の早い時間帯なら、ソプラノでもかなりよ
く歌えます。

クリッシュ それは素晴らしい。

ケリー 技術はありません。しかし、繊細な味が出せるん
です。

クリッシュ 殿下はきつと、ここでの生活にご満足なさる
ことと存じます。我々は非常に音楽を愛好する国民ですから。

ケリー 音楽を愛する？ それはいけませんな。

（ナディアヤ、自室より登場。柔らかな茶会服装。）

ナディアヤ この度は殿下にお越し戴き、とても光栄ですわ。

ケリー（ナディアヤの手にキスして。）こちらこそ光栄です。

叔母もじき現れるでしょう。

ナディアヤ とても楽しみですわ。

クリッシュ お許しがあれば、大公妃殿下をお迎えに上
が

り、ここまでお連れしますが。

ケリー それは御親切に。將軍のお申し出を喜んでお受け
す

すると思えます。

クリッシュ では、陛下。（ナディアヤの手にキス。）

ナディアヤ 有難う、クリッシュ。（クリッシュ、王子に会
釈して退場。この方がいいですね、最初に少し二人でお話

することが出来た方が・・・

ケリー ええ。私もそう思ってますくお受けしたのです。お

疲れでなければ宜しいのですが。今日はあの騒動で・・・

ナディアヤ ええ、大丈夫。それに、騒動という程のことで

もありませんでしたわ。

ケリー しかし、逆上した無政府主義者に発砲される、そ

して今まで会ったこともないフィアンセと会う・・・これを

十分以内にやってのけるというのは、気の滅入る話です、確

かに。

ナディアヤ ひよっとすると、もう少し経ってヒステリー発作が出てくるのかしら。さあおかけになって。

ケリー 宜しければ立っていていいでしょうか。これは私の人生にとつて、とても重要な瞬間です。ですから、その瞬間を立てて迎えたい気分なのです。

ナディアヤ この瞬間、それほど重要かしら。

ケリー 電話のお声はとても優しくかったのに、今は少し私のことを敵視していらつしやる感じですね。何故でしょうか。何か訳(わけ)があるのですか。

ナディアヤ 分りませんわ。敵視なんて、そんな。そう見えたらご免なさい。

ケリー 私は今、ひどくあがってしまっていて・・・

ナディアヤ(微笑んで。) あがつて? 本当?

ケリー ええ、勿論。

ナディアヤ それを聞いてほっとしたわ。

ケリー よかった。ほっとなさると思っていました。

ナディアヤ 電話でお声を聞いた時は私、とても幸せな気持ちでした。それが、顔を合わせたとたん、怖くなってしまったのです。叫び出したくなるほど。丁度その前に、クリッシユと話をなさっていましたね? その時のお声で私、変になったのですわ。明日はこの方と結婚するんだ、ということが、急に現実味を帯びてしまつて・・・その時までは何も考えず、本当に当り前のこととして受け入れていたことなのですの。

ケリー おかしなものですな。

ナディアヤ ええ、それに、悲しい話。

ケリー では、私は坐ります。一番ひどい話はすんだようです。

ナディアヤ(シガレットケースを渡して。) どうぞ、坐つて。一服して、寛いで下さい。(長い間。) 話したいことは山ほどあるのに、どこから始めたらいいのか・・・

ケリー 二人を結びつけたものは、単なる外交上の戦略です。それは暫く忘れて、私達二人の個人的な幸福についての戦略を考えることにしませんか。

ナディアヤ(疑わしそうに。) 幸福ですつて?

ケリー(微笑して。) ええ、まあ。手の届く範囲の。

ナディアヤ 今のこの状況、何て変なんでしょう。私達二人とは何の関係もない、遠くの遠くで起つて起つて居るのよ。明日結婚するのが本当にここにいる私達二人なのかしら。とてもそれが信じられないわ。

ケリー そう。結婚するのは、ここにいる生身の人間じゃないんです。その代りの操り人形なんですよ、結婚するのは。その方がお手軽ですからね。

ナディアヤ それでいいじゃないかっていう言い方ですわね?

それ。

ケリー ええ。

ナディアヤ それでいい筈はないわ。そんなのいけないって思つていらつしやる筈。私だつて。

ケリー いいえ、そうじゃないんです。たとえそうであっても、心配した程酷くないらしいって感じてきたのです、私は。

ナディアヤ まあ、有難う。

ケリー 実は、お会いしたら、典型的な愛の告白の場面でも演じようかって考えていたんです。勿論あなたに、すぐそれと分るように。こうすれば、二人がどういう関係にあるか、その気分が作れますからね。

ナディアヤ あら、じゃ、早速始めて下さらない？

ケリー まあ止めておきます。笑われるだけですから。

ナディアヤ ええそうですね。結婚についてお芝居するのは止めましょう。とにかく二人だけで会っている時には。

ケリー じゃ、公衆の面前では時々、燃えるような熱い視線を送ってもいいんですね？

ナディアヤ ええ、それが本場に必要なことでしたら。

ケリー まあ、明日の式典ではきつとそうなるでしょう。我々の見交わす目が、結婚式の「調印」になるのですから。

ナディアヤ 明日は疲れて、酷い頭痛になりそうだわ。私、式典の前にアスピリンを飲もうかしら。

ケリー じゃ、私も。

ナディアヤ 錠剤のままお飲みになるの？ それとも砕いてから水で？

ケリー 錠剤のままです。その方が飲み易いので。

ナディアヤ 私も。私達、沢山共通点がありますわ。

ケリー 喜ばしいことです。その方が万事順調に運ぶというものです。

ナディアヤ 殿下は野心がおありですか？ つまり、クライアーに対する。

ケリー ええ、あります。私は何事もうまくやってのけたい方なのです。あなたは？

ナディアヤ 私の欠点はそれがないこと。

ケリー なるほど。

ナディアヤ 私、これまでずっと酷い失敗ばかり。本当は一生懸命やってきたのです。でも、いつもたった一人離れ小島にいて、周囲は荒れ狂う海・・・それも襲いかかって来るような。時々島ごと私も、波に飲み込まれてしまうのではないかって、とても怖いのです。

ケリー それは大変だ。

ナディアヤ 私の気持、お分りになりますか？

ケリー 勿論よく分ります。だから私はここに来たのです。あなたをお救いするための闘いならば、尻込みはしません。私に今まで欠けていたこと、それは確固たる目標を持つということなのです。

ナディアヤ クライアーが確固たる目標になるかしら。

ケリー ええ。私はクライアーを、平和で幸せな国にしたい。そしてあなたを、平和で幸せな女性にしたいのです。あなたの目の中の暗い光を見て、私はどうしてもそうして上げたい、と思ったのです。

ナディアヤ 有難う。優しいわ、そんな風に言ったださるなんて。

ケリー そうだ！ 昨晩は、何か暴動があったそうですね。

ナディアヤ ええ、それ自体は大したことはなかったのですが、こういう状況では不吉ですわ。

ケリー ああいう忌々しい扇動家達は、みんなひっ捕えて、裁判など省いて、銃殺にしてやりたいですね。

ナディアヤ それは事態をもっと悪くするだけですわ、結局

は。私、今日の午後、殆ど銃殺されるどころだった、裁判なしで。

ケリー ああいうことが起きそうだなって、予感がしていました。でもあれは劇的でしたね。まるでロマンティックな芝居を見ているようでした。陽光に照り輝いて翩翻（へんぱん）と翻（ひるがえ）る沢山の旗。最上段に凜（りん）とたっているあなた。頭には王冠のダイヤモンドが煌（きら）めいている。ああ、両腕を大きく拡げるんだな、と私は思っていました。そして「おお、愛する我が臣民、我が臣民よ！」と呼び掛けるんだらうって。

ナディアヤ いえいえ、それは本当に革命が起つた時の話。手に手に松明（たいまつ）を持って喚（わめ）きたてる暴徒が、宮殿を包囲した時のことですわ。

ケリー 手に手に、鎌です。松明だけじゃ駄目。どうしても鎌でなくちゃ。

ナディアヤ じゃあ私は白装束。両腕に赤ん坊を抱えてバルコニーに出て行かなくちゃ。

ケリー 赤ん坊は、どこから借りて来なければならぬかな？

ナディアヤ 借りて来た赤ん坊でも大丈夫。母親はみんな鎌を捨てて家に帰る。それで群衆はチリチリ。

ケリー それで革命はお仕舞い。

ナディアヤ そう。その後二人は幸せに統治を続けましたとさ、めでたし、めでたし。（溜息をつく。）現実って、こううまくは行かないの。駄目ね。

ケリー 現実だって、素敵な瞬間があるんでしょっ？

ナディアヤ ええ、でもそれは呆気ないほど短い。

ケリー（視線を落し。）ええ、呆気ないほど短い。

ナディアヤ でも時が経つと、素敵な瞬間が短かったことに気にしなくなるのでしょうか？ 後から考える時には。

ケリー 場合によりますね。きっと大抵の場合、何か見返りがあるんでしょう。

ナディアヤ あるかしら？

ケリー ええ、きっと。ただ人は、その見返りに気がつかない。

ナディアヤ じゃあ、「あの時こうしていたら・・・」とあまり考えるのは止めた方がいいという主義ですね？

ケリー ええ。無駄でしょう。

ナディアヤ そう。無駄。仰る通り。ちょっと冷酷なのね、きっと。

ケリー（微笑む。）私が・・・冷酷！

ナディアヤ じゃあ、「物に動じない」。

ケリー ええ、そう言つて下さると有難いです。動じないよう、努力しているんですけど。

ナディアヤ とても大変なこと？

ケリー ええ、時には。

ナディアヤ 何をどうやっても駄目って、そんな風に見える時がありますわ。そうでしょうか？

ケリー そういふ時が、危ない時です。

ナディアヤ ええ。

ケリー さあ、元氣を出して。

ナディアヤ 私、本当に落ち込んで、いないの。

ケリー それは良かった。

ナディアヤ でも、何だか奇妙な感じ。

ケリー おやおや！

ナディアヤ あら、私のこと、お笑いになって・・・

ケリー これは失礼。

ナディアヤ いえ、いいんです・・・私、時々夢中になって、自分の気持を抑えられないんです。もうお分かりですね？

ケリー よく分ります。

ナディアヤ 轡(くつわ)でもかけられない限り、お喋りが止らない時が・・・

ケリー それは警告ですか？

ナディアヤ ええ。私達、お互いのことは本当は殆ど何も知らないでしょう？ ですから、所々に目印を立てておいた方がいいと思って。

ケリー そういうものが必要になるとは思えませんが。

ナディアヤ そうであって欲しいわ。

ケリー「同舟(どうしゅう)相救う」。敵同志でなければ、尚一層です。

ナディアヤ 同じ船かしら、私達。

ケリー そうだと思いません。

ナディアヤ 実は私、あの眩(まぶ)しい陽射しの中で、初めてお会いした時、そんな感じがしたのですわ、直観的に。

ケリー(微笑んで。)その直観は正しかったのです。

ナディアヤ ということは私達、今は二人で、同じ大きな責任と、やり遂げねばならない多くの仕事を抱えて、ここに

るのね。永久に、心からの望みは遙か遠くに捨てて。

ケリー あなたの心からの望み、それは何でしょう。

ナディアヤ(静かに。)愛する人のもとへ帰ること。そして波風の立たない、静かな生活を送ること。ただ安らかで、甘くて、平和な生活。それがいつまでも続くこと。ああ、そうなればどんなにいいか。

ケリー 共通点がここにもありましたね。心からの望み・・・それは同じだった。

ナディアヤ お相手の女性は、御健在？

ケリー ええ、健在です。でも、とても遠くにいるので、二度と会う機会はありません。とにかく今ではもう、遅過ぎます。

ナディアヤ 本当に遅過ぎるのですか？

ケリー ええ。

ナディアヤ それはつまり、年を取り過ぎたということ？

ケリー 思い出と夢に縋(すが)って生きて来た者が、中年になってある日突然、その女性に再び会うのは不幸なのです。相手だって年をとっているでしょう？ 髪は白くなり、ひよつとすると、肥っているかもしれません。

ナディアヤ でも、愛はそれを克服するのでしょうか？

ケリー いえ、愛では駄目です。親愛の情なら続くのです。でも愛では駄目。特に今お互いに話した我々のような愛では。

ナディアヤ 悲しいこと！

ケリー ええ。でもこれはしょうがありません。いつまでも情熱の火をともし続けられる、たとえ燃料がなくても、と自分に言い聞かせようとしても、それは無理です。何年も経

てば火は自然に消え、灰になる。それは致し方のないことで
す。

ナデイヤ 何もかもすっかり忘れるなんて、出来るかしら。
ケリー いいえ、すっかり忘れるという訳には行きません。

我々は感傷的ですからね。ひどく感傷的ですから。

ナデイヤ そうね。

ケリー ええ、そうなんです。これからだって、「ああ、
ああしていればなあ」と、溜息をついて涙を流すことはある
でしょう。でも、ちよつと時間が経てば、それはただの空涙
(そらなみだ) だったと思うようになるのです。

(二人の小姓が、観音開きの扉をサツと開ける。)

小姓(登場を告げる。) ザルガー国、エミリー大公妃殿下、
並びにクリツシュ將軍。

(クリツシュ登場。その後ろに大公妃。)

大公妃(前に進み出て、ナデイヤに。) 今回のこと、大変
素敵な思いつきでしたね。公式の場以外では、あなたとお話
する機会はないんじゃないかと思っていましたわ。滞在期間
は短いし、予定がぎつしりですものね。

ナデイヤ 公式の予定をうつちやって、こつそりお越し戴
き本当に有難うございます。大公妃殿下とお会い出来て大変
嬉しいでございます。

大公妃 私の方こそ嬉しいですね。公式の予定って、いつ
でも酷いものですけど、こう暑い時には、それこそうんざり
ですもの。

ナデイヤ 今すぐアイステイーが出て来ますから・・・
「アメリカン」で。

大公妃 アメリカン！ 例の可愛らしい背の高いグラスに、
氷を一杯入れて出て来る、あれですの？

ナデイヤ(ベルを鳴らしながら。) ええ。

大公妃 まあ、何て素敵！ コウニー・アイランドだつた
わ、あれを戴いたのは、合衆国中色々なところを回つたけど、
ここが一番良かった。きつとその、アメリカン・アイステイー
のせいだわ。

ケリー あれは恐ろしく暑い日でしたからね。

(ザナ、ワゴン式のテーブルを引いて登場。テーブルの上には、
氷で一杯の背の高いグラスが四個、他に、午後の喫茶に
使う通常の付属品が載っている。ケリー、大公妃のために、
肘掛け椅子を引いて坐らせる。クリツシュ、プチ・フルな
どの入った、小さなケーキ・スタンドを大公妃に手渡す。)

大公妃 あなたとケリー、お互いに気に入ったかしら。そ₃₀
うだといんだけど。気に入らえすれば、これから先の
暮し方はずっと楽になるの。

ナデイヤ 私達、気に入っていると思います、お互いに。

大公妃 まあ、良かった！(クリツシュが差し出したケー
キを一つ取る。) あら、とても美味しいわ、これ。本当に、
何て有難いんでしょう。もう何年も厳しいダイエットを続け
て来ているんですの、私。それをおおっぴらに破つていいな
んで、嬉しい限りだわ。

ケリー おやおや、叔母さんがダイエットをしていたなん
て、私には全く記憶がありませんけど。

大公妃 そうそう、クリツシュ將軍。私、あなたに今日の
午後、壇上で歓迎の挨拶を受けましたわ。その時からずっと、

どこでお会いしたんだろうって、首を捻っていました。やっと今思い出しました。スタイヤー国でベネチア・カーニバルがあった時でしたね。

クリツシユ はい。確かにベネチア・カーニバルの時でした。随分古い話です。

大公妃 あなた、本当に覚えておいで？ それとも単なる社交辞令？

クリツシユ 本当に覚えています。プラム色のドミノ衣装をまとい、銀モールのついた仮面をつけていらっしやいました。

大公妃（ケリーから紅茶のグラスを受け取って。）プラム色？ あのドミノは栗色でしたわ。でもプラムだって、栗色のものがあるわね。あれは素敵な夜だったのよ。私は丁度十九歳。初めての婚約。お月様が煌々と輝く中を、透き通るようなゴンドラにのって私達、水の上を滑るように進んで行った。不幸なことね、あなたとケリー。ああいうロマンティックな機会が与えられないなんて。

ナディアヤ そういう機会がたとえあつても、無視する二人だとすれば、もつと大きな不幸ですわ。

大公妃（ナディアヤとケリーを交互に見ながら。）そう。じゃあ、あなた達二人の生活は、まづ友情だけを支えに始める決心をしたってということね？

ケリー ええ、出来ればそう・・・

ナディアヤ（ケリーをちらと見て。）私は出来ると思つています。

大公妃 あら、二人とも随分落ち着いているのね。そう、

確かにある点では、失うものも多いでしょうけど、長い目で見れば、疲れ方はずつと少ないでしょうからね。

ナディアヤ（笑いながら。）ええ、そう思います。

クリツシユ そういう観点から見れば確かに、政略結婚もそう酷いものではないという気が致します。

大公妃 私、この年になって分つたんですけど、政略結婚が一番いいの。自分自身の気持に従うよりも、他人が作った筋書きに従う方がずつと楽ですもの。

ナディアヤ（きつぱりと。）それは違いますわ。いつも自分の気持には正直でなければ。出来る限り。

大公妃 とても素敵な考えね、理屈の上では。でも実際は、失敗して憂鬱になるのがオチ。大抵はね。私も何度もやっってはみたけれど、結果は散々だったわ。

ケリー それは叔母さんが相手を選ぶ時に勘が悪かっただけのことではありませんか？

大公妃 そうかもしれないわね。私はいつだって、恋愛にはひどく自意識過剰だったから。（ナディアヤに。）あなたもそうじゃなくって？

ナディアヤ ええ、多分私も。

大公妃 私、今までに夫は三人。

ナディアヤ 満足でいらつしやいました？ その方たちに。大公妃 満足というのは当たらないわ。でも、面白い人達だったわ、三人とも。

ケリー 今の叔母からは想像つかないかもしれないけど、叔母はかつて、ザルガー国始まって以来の、最もロマン스에満ちた女性だったんですよ。

大公妃 昔、昔、大昔にね。

ナディアヤ その三人の方の前に？

大公妃 いいえ、最初の夫がいた時のこと。

ナディアヤ まさか。では、その方を捨ててお逃げに？

大公妃 ええ、逃げたの。でも、すぐに戻って来た。誰だつてそうするわね？

ナディアヤ そう、誰だつて・・・不思議なことに。

大公妃 私達の人生は、自己犠牲の連続。もう不思議なことでも何でもなくなっている。

ケリー 平板極まりなし。

大公妃 そう、その通り。

ナディアヤ もうそろそろ、誰がその伝統を破るべき時ですわ。

大公妃（ナディアヤを鋭く見て）私、昔、それを言ったの。

ナディアヤ（勢い込んで）では何故そうならなかったんですか？

大公妃 同じ理由からでしょうね、あなたがそう出来ないでいるのと。

クリッシュ もう少しお茶を戴いても宜しいでしょうか。

（訳註 二人の話題に危険を感じて、話を逸らせるための台詞）

ナディアヤ ええ、勿論。気がつかないでご免なさい。（クリッシュのグラスに茶を注ぐ。）

大公妃 大丈夫ですよ、將軍。私、足元がしっかりして安全な時には、無分別な話などしませんから。

クリッシュ 有難うございます。（訳註 これは茶を注い

だナディアヤに対して言う台詞。原文ではナディアヤの台詞となっているが、クリッシュの台詞と思つ。）

大公妃 本当よ。嬉しい驚きがあった時は、ついつい口が軽くなりますけれどね。

ナディアヤ とても親切に色々お話し下さいましたわ。私、わつと泣き出してしまふんじゃないかしら。

大公妃 さ、夢破れし恋と王冠の物語はこれでお仕舞い。もつと楽しい話にしましょう。

ナディアヤ 大公妃様つて何て羨ましい方！

大公妃 優しいことを言うてくれるわね。どうして羨ましいの？

ナディアヤ ！自分の人生を上手に、幸せに過ぎてこられた・・・それに楽しく・・・ええ、きつと面白がつていらしたんですわ、酷いことがあつた時でも。

大公妃 とにかく、今そう思えるつていうことが有難いわ。

ナディアヤ 人生を楽しむ秘訣 それを教えてくださいませんか？

大公妃 自分のことであまり深刻にならないこと。

ナディアヤ やつてみますわ。

ケリー やつてみます、二人で。

（電話が鳴る。）

クリッシュ ああ、きつとあれは私です。

ナディアヤ じゃあ出て、クリッシュ。（クリッシュ、電話に進む。）大公妃様、もう少しお茶は如何ですか？

大公妃 いいえ、有難う。

ナディアヤ（訊ねる調子で）ケリー、あなたは？

（ケリー、首を振る。クリッシュが丁度話し始めたため。）

クリツシユ（電話に。）もしもし。・・・ああ、私だ。君がミルテ。何だ？・・・ああ、そうか。その男の名は？・・・フロラン？（訳註「ラ」にアクセント。）・・・フランス人だな。（ナディアヤに。）例の狙撃を逸らせた男が着いたそうです。謁見のお約束をされた、あの男です。

ナディアヤ そう。十分後に控えの間に連れて来るよう伝えて。

クリツシユ 十分後に控えの間に連れて来てくれ。陛下が謁見される。・・・そうだ。・・・ああ私に今？・・・分つた。すぐ行く。（受話器を置く。）

大公妃 まああなた、もういらつしやる？ 軍の御仕事、急務ですの？ 私、あなたにはまだ色々お訊きしたいことがありますのよ。

クリツシユ それは今晚までお待ち戴く訳にはいきませんか。でしようか。

大公妃 結構よ。でもその間に、外交辞令で逃げをうつ台詞をあれこれ考えるには及びませんからね。お訊きたいのは、政治以外のお話。

クリツシユ それを聞いてほつと致しました。（大公妃の手にキス。）

ナディアヤ 七時には戻つて来て頂戴、クリツシユ。いくつか相談したいことがありますから。

クリツシユ はい、畏まりました。（ナディアヤの手にキス。ケリーにお辞儀して、退場。）

ナディアヤ あの人を私、今一番信頼しているんです。

大公妃 ええ、魅力的ね。それに取り仕切る役柄にピッタ

リ。あの礼儀正しき、灰色の髪、それにテキパキとした手腕。ナディアヤ、ゼンダ国、サブト陸軍大佐のいとこなんですの、あの人。

大公妃 ああ、それだったら私、気がついていても良かったわ。ああいう人が傍にいと、とても心強い。ヨーロッパの宮廷は、どこでもああいう人が支えてくれているわ。

ケリー サブト大佐・・・あのじいさんなら、よく覚えていません。ヘンザー国のルパート氏とうちの父とは同じ学校に通っていましたからね。

大公妃 あなたが謁見をするという男は、ここの護衛隊員？ それとも全然知らない人？

ナディアヤ 全く知らない人です。私が親しく会つて礼を言うのがこの際賢明だと。クリツシユの考えです。

大公妃 クリツシユ將軍の言う通りだわ。にっこり微笑んで、こう言うの。「御親切は私、一生忘れません」って。そうすればその人、一生あなたに忠誠を尽すわ。

ケリー 今我々に必要なのは、正にその忠誠心・・・そしてそれをどれだけ多く手に入れるか、です。

大公妃 今はどの国でもみな同じ。忠誠心が欲しいのよ。ナディアヤ 丁度皆様がおいでの中の、お呼びがかかってしまつて、とても残念ですわ。今日はこうした邪魔が入らずに過せたらと思つておりましたのに。

大公妃 まあ、気になさらないで、私のことは。私も今まで何度も狙撃されたことがあるけれど、幸運なことに一度もまともな当たったことがないの。あのお馬鹿さん達、よつぽど興奮して目が見えなくなつていたのね。

ケリー 革命はこれまで四回あったけれど、叔母さんはいつも、怪我ひとつなく済んで来たんです。

大公妃 五回ですよ。ポール叔父さんが、あの公共墓地で風揚げに夢中になって、それで起きた小さいのも入れれば、あの人の風好きったらなかつたわね。

ナディアヤ（微笑して。） 下層民というのは、その手のことにひどく目くじらを立てますからね。

（大公妃、立上る。）

大公妃 ケリー、私はそろそろ下つて休みます。（ナディアヤに。） 本当に楽しかつたわ。あなたも政情が収まったら、是非うちの方にいらして下さいね。

ナディアヤ ええ、喜んで。

ケリー（ナディアヤの手を取り、腰を屈め。） では、後ほど。

ナディアヤ（優しく。） 殿下のお陰で、色々と気にかかつていたことがすっかり晴れましたわ。どうも有難う。

大公妃 こうしてみると、私までクライアーに来る必要はなかつたようね。でもご免なさいね。私、ちよつとあなたの昔のことを聞いていたものだから、それでどんな方なのかしらつて・・・（突然ナディアヤにキスして。） いい？ 今一時（いつとき）不人気だからつて、くよくよ考えちゃ駄目よ。あなたにたとえどんな緋色の過去があつたとしても、それ以上あなたはとて素敵な人。その魅力はこれから先ずつと続くんですからね。

（大公妃退場。ケリー後に続く。ナディアヤ、暫くじつと立っている。半ば微笑みながら。それから振り返り。）

ナディアヤ（呼ぶ。） ザナ、ザナ。

ザナ（登場。） はい、マダム。

ナディアヤ（指輪を外して、ザナに渡す。） あなたの勝よ、ザナ。はい。

ザナ（躊躇（ためら）つて。） まあ、マダム。私・・・ナディアヤ 取つて頂戴、ザナ。さあ、くすぐす言わないで私を氣遣つて、安心させようとしてあなた、色々と請け合つたことがあつたけれど、そのうちの一つは本当だつたわ。彼とつても優しい人だつた。

ザナ（指輪を受け取り、膝を床につけるお辞儀をして。） 有難うございます、マダム。お写真から、きつとそうだろうと。

ナディアヤ 物事つて、変わるものね。

ザナ はい。

ナディアヤ 私 この国をこんな風に見たこと、一度もなかつたわ。

ザナ それは、この国が自分のものだと感じになつたからではありませんか？

ナディアヤ いいえ、それはまだ。この国はまだ私のものではないの。私が国民に愛されるようになるまではね。ああザナ、私、今では国民の支持のことについても、すっかり氣持が變つたの。私にはもうすぐ、責任を分かち合つて人が出来る・・・一緒に笑つたり、忠告を求めることの出来る人が。あの方には、とびきり素敵なユーモアのセンスがあるわ、私達、ゲラゲラ笑つたのよ。それも革命の話で！

ザナ（驚いて。） まあ、革命・・・ですつて？

ナディアヤ そう、革命。大したことじゃない筈、革命なん

て。たとえ起つたつて、長くは続かないわ。あの方、その時は自ら戦う覚悟なの。私もそう。二人で奪還するのよ、この国を！（両腕をさつと拡げる。）ようやく将来の展望が開けて来たの！急いでお茶のものを片付けて頂戴。今日の午後私の命を救ってくれた人と会ふの。彼には親しくお礼を言うつもり。キスもして上げるわ、多分。

（ナディヤ、ベルを鳴らす。ザナ、急いで、散らかつたお茶のセットを集め、ワゴン式のテーブルの上に置き、それを引いて部屋から退場。ミス・フィッパス登場。）彼、もう来てるの？ ミス・フィッパス。

ミス・フィッパス はい、陛下。武装した護衛と一緒に。

ナディヤ 護衛はいらないわ。私一人で会いましょう。

ミス・フィッパス 畏まりました。（ミス・フィッパス退場。ナディヤ、鏡の前で髪を整える。二人の小姓、登場。）

小姓（登場を告げる。）（ムツシュー・フロラン。）

（サビアン登場。非常に蒼ざめ、気持を抑えようとしているのが明らかに見てとれる。ナディヤ、反射的に片腕を上げる。その掌（てのひら）が楯で、その楯で自分を庇（かば）うかのよう。）

サビアン ナディヤ！

ナディヤ サビアン！（両手に顔を埋める。）ああ、どうしてこんな酷いことを。

サビアン（震えながら。）僕には・・・僕には、こうするより、仕方なかったんだ。

ナディヤ 出て行つて。

サビアン それは出来ない・・・今はまだ。

ナディヤ（咄嗟（とつさ）に。自分の気持を抑えて。）出て行くのです。

サビアン 僕は行かない。運命の女神が今日僕に、幸運を与えてくれたんだ。女神に逆らうことは出来ないだろう？

（サビアン、ひどく哀れに笑う。）

ナディヤ 出て行つて。

サビアン こんな成行きになるなんて、ただの偶然である筈がないんだ。

ナディヤ（気持を落ち着けて。）ここには来てはいけなかったの。どんなことがあつても。

サビアン 来ないではいらなかったんだ。一年前、君がパリを去つた時、君は僕から、愛だけじゃない、何もかも奪つてしまつたんだ。僕は、本を読むことも、音楽を聴くことも、何かが美しいと思うことさえ出来なくなつた。あれからの僕は、まるでつんぼだ、盲（めくら）だ。

ナディヤ 私、何て言えはいいか、分らないわ。

サビアン ほんの少しでいい。君の近くにこうしていることが出来れば、昔の幸せが戻つて来る。幸せの影みたいなものだけ・・・君が話をするのを僕は聞きたいんだ。

ナディヤ（サビアンに背を向けて。）ああ！

サビアン 頼む。こつちを向いて。好きとか嫌いとか、そんな話じゃなくていい、ただの、普通の話でいいんだ。

ナディヤ（笑い始める。）全く、馬鹿げているわ。

サビアン 笑わないで。お願いだ。

ナディヤ どうして？ 嘆き悲しむことがないのよ。笑うしかないでしょう？

サビアン 難しいことじゃないだろう？ 話をしてくれ
ていう僕のこの頼みは。

ナディアヤ（笑い続けて。）ええ・・・そうね。

サビアン 止めてくれ、笑うのは。

ナディアヤ 駄目。

サビアン じゃ、キスするぞ。

ナディアヤ 駄目よ。

サビアン お願いだ。

ナディアヤ 駄目、駄目。あっちに行つて。

サビアン 怖いんだな？

ナディアヤ いいえ、怖くはないわ。

サビアン ここでの暮しのことを話してくれ。

ナディアヤ ああ、サビアン！（笑い声、高まる。）

サビアン お願いだ。笑うのは止めてくれ。

ナディアヤ 許して頂戴・・・ヒステリーの発作よ、これ。

サビアン 僕のこと、まだ愛してくれている？

ナディアヤ あなたの思い出なら、愛していたわ・・・つい
さっきまでは。

サビアン ナディアヤ！（ナディアヤの手を取るつとずる。）

ナディアヤ お止めなさい！

サビアン 失礼・・・僕はどうかしているんだ。急に君

と再会して・・・こんな間近に君を見たから・・・

ナディアヤ あなたはもう私の間近にはいないの。あなたは

たった今、私を自由にしてくれた。だから私、笑っているの。

サビアン どういう意味なんだ、それは、一体、頼む、頭

がひどく混乱していて、よく分らないんだ。

ナディアヤ だから、本当は私、あなたがこつやつて来てく
れたことに感謝するべきなのよ。

サビアン そんなことを言うなんて君、僕によつぽど腹を

立てているんだね。僕は無理矢理君に逢おうとしてこんなこ

とをしたんじゃない。それはさつきも言った通りだ。運命の

女神が取り持つてくれたんだ。・・・何故なんだろう。

ナディアヤ 分らないの？

サビアン うん、分らない。

ナディアヤ だから、それが運命の皮肉なのよ。

サビアン なんて綺麗なんだ、君は。

ナディアヤ 私達、昔はお互いに随分愛し合っていたわ。で
も、今はもう違うわ。

サビアン 今は・・・違う？

ナディアヤ ええ。今はもう愛していない。あなたはただ、

それに気がついていないだけ。私は気がついたの。

サビアン（苦々しく。）何ていう話だ。僕には分らない。

僕に分るように話してくれ。是非。

ナディアヤ 煙草か何か、いらない？

サビアン いや、結構。

ナディアヤ どうしてあなた、もっと早く来なかつたの？

サビアン ナディアヤ！

ナディアヤ じゃあ言いましょう。・・・あなたは私を愛し

過ぎたの。

サビアン そうか。そういうことが。・・・筋だけはひど

く通っている。

ナディアヤ 分つて来たでしょう？ それで。

サビアン（軽い調子で。）うん、ちゃんとね。

ナディヤ（弱々しく。）じゃあ、それなら・・・

サビアン 僕、君とキスしたいよ。

ナディヤ 何のために？ 私達の愛で、そんな事が大事だったことは一度もないのよ。

サビアン それはそうだ。

ナディヤ そんな悲しい顔をしないで、サビアン。今はあなた、幻の呪縛から解き放たれているのよ。幻の中にいるよりずっと苦しくない筈でしょう？

サビアン 今日僕がここに来た。それで、僕に対する君の愛はすっかり終りになった。・・・これが僕に納得させようとしている君の筋書きなんだね？

ナディヤ 今日終ったんじゃないの。あなたへの愛は、実際はもうずっと前に終っていたの。それに気づくのに私、あなたより有利な立場にいたわ。だって、私にはこの国の政治があった・・・女王の地位にいた・・・本当に忙しかったの・・・

サビアン うん、そうだね。良く分るよ。

ナディヤ その忙しさのお陰で、却って物がはつきり見えるようになったの・・・こんな事を言って私、あなたを傷つけているわ・・・ご免なさい・・・でもあなたにも私のこの考えが正しいって、すぐ分る筈・・・そう、あなたならきくと分る筈。

サビアン ああ、何て素敵なんだ、君は！

ナディヤ お願い、ここから出て行って・・・どうか・・・今すぐ・・・

サビアン そんな君の嘘・・・そんな君の可愛い嘘が僕に見抜けないとでも思っているのか！（さつとナディヤを両腕の中に抱きしめてキスする。）君は僕を愛している。まだ愛

しているんだ、僕を。・・・ナディヤ！・・・

（サビアン、再びキスする。ナディヤ、サビアンを押し退ける。腫がかつと燃える。）

ナディヤ 何てこと！・・・こんな無茶なことを・・・酷いことを！・・・

（ナディヤ、握り拳（こぶし）で自分の額を叩きながらサビアンの前に立つ。）

サビアン 愛してる。僕は君を愛しているんだ。

ナディヤ ああ、どうしたら・・・どうしたらいいの！

（真直ぐ前に進んで、サビアンの腕の中に身を委（ゆだ）ねる。サビアン、ナディヤを抱きかかえて、そのまま動かない。3

サビアン、目を閉じる。暫くしてまた開く。そして話し始める。囁くような話し方。）

サビアン 夢だ。・・・これはみんな夢だ。

（サビアン、ナディヤを抱えて部屋を横切り、ソファに横たえる。少しの間の後、ナディヤ目を開け、サビアンを見る。）

ナディヤ あなた、変ったわ、サビアン。随分痩せた。サビアン ああ、あの時僕から逃げて行くなんで・・・何故・・・どうして・・・

ナディヤ 止めて、そんな話。

サビアン 僕が今日来て、良かったんだね？

ナディヤ 良かった！ 良い訳がないでしょう。この長い間のあなたとの闘い・・・あなたの思い出を一つ一つ消して

行こうと、そしてここでの生活が少しでもまともになるようにと。私の惨めな目付きが、皆に見破られないようにと。そして今やつとのこと、この国のために、本当の熱意と目的と野心が生まれてきた。それがどう。あなたがやって来て、何もかもぶち壊し。丁度今、勇気と自制心が一番必要なこの時に・・・ああサビアン、あなた、何ていうことを・・・

サビアン 僕の・・・この僕の苦しみは、君の考慮の外だったのか。

ナディアヤ いいえ、考えたわ。でも・・・

サビアン（苦々しく。）でも、そんなことは問題じゃない。

そうだね？

ナディアヤ 問題にしてはいけないのよ。

サビアン 何が国だ・・・国・・・君の国・・・そんなもの

の糞食らえだ！

ナディアヤ 駄目、それは。そんな言い方、下品だね。

サビアン ああ、すまない。許してくれ。これじゃあ君を

困らせるために来たようなものだ。でも誓ってそんなつもり

じゃなかった。僕は今までずっと君から離れていた。しかし、

もう我慢が出来なくなつたんだ。それで三週間前にここに來

て・・・でも、その事を君に知らせるつもりは全くなかった。

それから今日の午後、あの発砲・・・そして、君が僕に会

いたいという知らせが來た。僕は氣違ひのようになった。グラ

グラ笑つて、大声で叫んで、そして泣いた。僕の部屋で。たつ

た一人で。僕はてつきり君が、何かの方法で、あれが僕だと

分つたんだと思い込んでいた。そして僕に・・・君がこの僕

に会いたいんだって思つたんだ。しかし、暫くしてやっと氣

がついた。君はただ女王として、一人の忠実な臣下に感謝の言葉を述べたい・・・それも如才なく・・・それだけなんだつて。僕は氣がつくのが遅過ぎた・・・それまでに君との再会の場面を何度も頭の中で繰返し、繰返し・・・まづ君に会う。最初は大勢の人がいるところだ。君の手に礼儀正しくキスする。誰にだつて二人の関係は分りはしない。それから君と二人だけになる。そして君のあの声が、もう一度聞ける・・・この場面を何度も何度も。ああ、分るだろう？ そんな僕にどうして後戻りが出来るんだ。僕には出来なかつた。出来るわけがなかつたんだ。

ナディアヤ そうね。それは・・・無理ね。

サビアン ナディアヤ、君はまだ僕を本当に愛してくれてい

る？ 昔のように。

ナディアヤ ええ。

サビアン 逃げ道はないの？ どこにも？

ナディアヤ ないわ。

サビアン もし革命が起きて、退位させられたら？

ナディアヤ 追放ね・・・夫と共に。そして二人でじつと待

つのね、時局の好転を。

サビアン（苦々しく。）時局の好転！

ナディアヤ そうよ。

サビアン 僕は自殺する・・・死ぬんだ！

ナディアヤ ああ、そんな事しないで。忘れるわあなた・・・

そのうち。

サビアン 忘れる・・・そんな時まで待てるわけがない！

ナディアヤ 忘れるまで、私は待つ・・・待たなければなら

ないわ。

サビアン 君には待っている間、その空白を埋められるものがあるんだ。僕には何も無い。

ナディアヤ（涙を浮べて。）そう。ないわね・・・あなたには。

サビアン 僕にはその間、君を一度でも自分のものにしたという・・・思ひ出さえもない。

ナディアヤ ええ・・・それさえ・・・

サビアン 僕を夫としてはくれないんだ、君は。僕はこれから、生涯君なしで生きなきゃならない。あれほど夢を、計画を、希望をもつて君との生活を思い描いていたのに・・・ね、僕を恋人にして！

ナディアヤ（背を向けて。）いいえ。

サビアン じゃいい・・・一度だけ・・・たった一度だけで・・・

ナディアヤ いいえ。私はこの国の女王。

サビアン そんなの、英雄主義じゃないか！ 本気じゃない筈だ。

ナディアヤ いいえ。本気。いい？ サビアン。聞いて。もし、たった一度でもあなたに身を任せたら、私がみんなにかけていた魔法はそれでブツツリ切れてしまふ。英雄主義じゃないの、これは、魔法が切れるの。私にはそれがはっきり分っている。この国の人達は私の過去を知っていて、それで私が嫌いなもの。だから私、今日まで、毎日毎日、その嫌悪と邪推を消そうと必死だった。私の過去は別の人生で、今の私とは関係ないって、みんなにも自分にも暗示をかけていた。あれ

は統治という重い責任に目覚める以前の私で、あの過去は綺麗さっぱり忘れられるべきものだって。その魔法が・・・

サビアン（ナディアヤの手を情熱的に握って。）ああ、ナディアヤ、お願いだ。

ナディアヤ（後ずさりして。）やめて。「お願いだ」なんて言わないで。私を助けて。私のこの立場、分るでしょう？ 分って！ お願い。

サビアン（ナディアヤに詰め寄って。）ナディアヤ、ナディアヤ、そんなことを僕に分（わか）れだなんて、無理だ。今晚！ お願いだ。今晚・・・

ナディアヤ いいえ、駄目・・・駄目。

サビアン その後は、もう二度と君の前には姿を見せない。ナディアヤ 姿を見せなくても、どこかで生きていて、私に分っているじゃない。私のことを思って・・・苦しんで・・・

・私にも心の平安はなくなるわ・・・永久に。

サビアン 明日（あした）僕は死ぬ・・・どっちにしても。明日は君の結婚式なんだから。

ナディアヤ（両手に顔を埋めて。）ああ、止めて、それは・・・それだけは。

サビアン（急に静かな調子で。）それはもう決ったことなんだ。ナディアヤ・・・いとしいナディアヤ。それに、一番いい方法なんだ、それが・・・君にも分るだろう？ 死ぬなんて、僕達二人が耐えて来た不幸に比べれば、ちつぽけなことじゃないか。僕は死ぬなんて、怖くも何ともない。もし君が僕だったら、君だって怖くも何ともない筈だ。

ナディアヤ（優しく。）ええ。

サビアン 明日、僕は死ぬ。何が起ろうと。分るね？ 何が起ろうとだ！

ナディアヤ（真直ぐ前方を見て。）分ったわ。

（サビアン、両腕にナディアヤを抱きしめ、キスする。）

サビアン（囁く。）もう一度言つて。「分った」って。

ナディアヤ（目を閉じて。）分ったわ。

（幕）

第三幕

第一場

（場は、第二幕と同じ。午後二時半頃。幕が上ると舞台は隈なく照明されている。観音開きの扉の一つが少し開いている。階下で奏されている音楽が聞こえる。）

（ザナ、右手の扉から登場。部屋を横切り、左手前の観音開きの扉をしっかりと閉める。それから、右手の扉に戻り、合図する。）

（サビアン登場 正装の夜会服装。その上に長い黒い外套。）

ザナ 静かに。決して音を立ててはいけません。

サビアン 鼠のようにするよ、ザナ。

ザナ 私の部屋でお待ち下さい。ここです。（部屋の扉に進む。）

サビアン 煙草を貰えないかな。

ザナ どうぞ。（一本渡す。）

サビアン 酷く奇妙な感じだね。

ザナ はい。

サビアン まるで夢の中にいるみたいだ。現実感がない。

ザナ ひよつとすると、これは夢なのです。

サビアン 夢から覚めちゃいけないというこの気分・・・これが重くのしかかつて来るね。

ザナ はい。

サビアン 長くかかるのか？ あの人は。

ザナ いいえ。今夜は舞踏会ではありません。ただの大礼

晩餐会ですから。

サビアン ナディアヤが大礼晩餐会・・・（笑う。）ちょっと想像出来ないな。

ザナ きつと陛下も、酷くご退屈な筈です。

サビアン 陛下！ ああ、ご免、ザナ。すっかり忘れていたよ。これも夢の一齣（こま）だね。

ザナ いいえ。こちらの方は現実の一齣です。

サビアン ねえ、ザナ。君はもう、以前のように、僕に親

しい調子では話せないんだね？

ザナ はい、それは。

サビアン 見知らぬ人として話すんだね？

ザナ そうではありませんけれども。

サビアン けれども・・・どうなの？

ザナ 私、怖いんです。

サビアン 僕のことか？

ザナ はい。それに他にも。

サビアン 僕がこんな所に来てはいけなかったのに、と思つ

てるんだね？

ザナ はい。

サビアン 仕方がなかったんだ、ザナ。

ザナ はい。

サビアン 仕方がなかったんだ、ザナ。

ザナ はい。

サビアン ケリー王子はナディアヤを愛しているのか？

ザナ 私には分りません。

サビアン こんなこと、君に訊いちやいけなかつたね。

ザナ 違うのです、全てが。パリとここでは。

サビアン うん、分る。パリが恋しくない？

ザナ はい。時々は。でも、ここは私の国です。私はここで生れました。

サビアン よく分るよ。

ザナ 陛下もそのことでは、私と同じように感じていらっしやる筈です・・・今では。

サビアン ナディアヤはここで幸せだったことは一度もないんだ。

ザナ 過去は過去です。未来は未来として考えなければ。

サビアン 誰もがそう考えるところに限らないよ、ザナ。煙草を箱ごと持って行ってもいいかな？

ザナ はい、どうぞ。（サビアンに煙草の箱を渡す。）

サビアン 君には本当に感謝しているよ、ザナ。

ザナ（唇に指をあてて。）シーツ。

サビアン（囁くように。）君には本当に感謝しているよ、ザナ。

ザナ さあ、早く中に。誰か来ます。

（サビアン、ザナの部屋に退場。ザナ、扉を閉める。控えの間から、急いで近づく足音がする。ミス・フィップス登場。帽子とコート姿。帽子には厚いベール。今はそれを上に上げてある。酷く興奮した様子。後ろ手に注意深く扉を閉める。

動作全体に、何か重大な秘密を隠しているという様子。（

ミス・フィップス（息を殺して。）ザナ！

ザナ（驚いて。）どうしたの？ 何かあったの？

ミス・フィップス（不吉なことを知っているという調子で。）

ないわ・・・今はまだ。（帽子を脱ぐ。）

ザナ どこに行つてたの？ こんな時間に。

ミス・フィップス 町よ。（監視の目や耳がないかと心配するように、注意深く周囲を見回して。）「ブルー・ローズ」。

ザナ（驚いて。）まあ！「ブルー・ローズ」！

ミス・フィップス そう。たった一人で。

ザナ 一人で？ 一体どういうつもり？

ミス・フィップス ドアのすぐ近くの席を取つたわ。襲われた時の用心にこれを持って。（コートのポケットから小型の拳銃を取り出す。）

ザナ 出かける前に弾丸（たま）は抜いておいたんでしょうね？

ミス・フィップス ええ、勿論。拳銃だけでも安心出来るから・・・有難いことに、誰も私に気がつかなかった・・・一人を除いて・・・あのお爺さん以外は。

ザナ（笑つて。）あらあら、ミス・フィップス。おかしな話！

ミス・フィップス（厳しい口調で。）何を言つてるの。浮いた話じゃないの、ザナ。私、危険を覚悟で出かけたのよ。

ザナ それで、そのお爺さん、どうしたの？

ミス・フィップス 私にオリーブの実を渡してからこう呼んだの、「やあ、姐さん」。

ザナ ええ、それで？

ミス・フィッブス（熱心に。）「ここは一つガツンとやらなきやいけないな。それで、身を前に乗りだして、ペールをさつと後ろに払って言うてやったわ。」「いい男ね、あんた。シャンペンでもやりましょうよ。」

ザナ（笑いを抑えて。）「それで、何て言ったの？ その人。」

ミス・フィッブス（勝ち誇ったように。）「何も。ただ真直ぐ歩いて出て行ったわ。」

ザナ でも、ミス・フィッブス。一体何だつてあんな所に行つたの？

ミス・フィッブス 目的があつたの。

ザナ どんな？

ミス・フィッブス この国の人達が何をやるうとしているのか。あの怖い革命を本気でやる気なのかどうか。

ザナ それで、やる気だつて分つたの？

ミス・フィッブス 分らない。

ザナ で、何かは分つたの？

ミス・フィッブス いいえ、何も。でも、言うておくけど、とても危険。それだけは確か。

ザナ だけど、「ブルー・ローズ」はただ単にいかかわしい店つていうだけの所よ。革命なんて、何の関係もないわ。

ミス・フィッブス（再び帽子を被り。）「そう。ならいいわ、それで。」

ザナ（押しを強く。）「他に何か分つたら、教えて頂戴。」

ミス・フィッブス もう私、自分の部屋に上るわ。服はこのまま。寝間着には着替ええない。もし何かあつたら、起して

下さるわね？

ザナ 「何かあつたら」の、その「何か」によるわね。

ミス・フィッブス（怒つて。）「まあ！」

（ミス・フィッブス退場。ザナ、まだ笑いながら、左手奥に行き、窓を閉める。控えの間に人声がして、ナデイヤ、続いてケリー王子、登場。ナデイヤ、白の夜会服にいくつか勲章をつけ、頭には小さな冠。）

ナデイヤ 送つて戴いて嬉しいわ。お入りになって、少しお話でも？

ケリー いえいえ。そうでなくてももお疲れの筈。それに明日の事・・・それを考えなければ。（「ぞつとする」というように身震いして、笑う。）

ナデイヤ 考えなくちゃいけないかしら？ 明日の事まで。

ケリー そうそう、明日のことですが、これが明日の行事予定表です。クリツシュ將軍に言われていました。お渡しするようにと。

ナデイヤ ああ、有難うございます。（紙片を机の上に置く。）「でも私、こんなもの見ない。決して。操り人形のように、ただただ操られるままにするつもり。その方が疲れないわ。」

ケリー そう。私もそのつもりです。

ナデイヤ まあ、殿下が操られるなんて！ いけませんわ。

殿下は決断の人・・・物事を見事になさる方・・・そう、今夜だつて素敵なスピーチ。私、今まであんなに魅力が前面に出ているスピーチは聞いたことがありませんわ。それを聞いた人が、食べ物に困らないたつた一握りの廷臣達だけだつた

なんて！ 私、この国の全ての人に聞かせたかったわ。

ケリー そう。私のスピーチで使われている言葉は、綺麗過ぎるんです。恥づかしそうで、幼稚なんです。老練な政治家が多い場では、この方が受けがよいものですから。

ナディアヤ まあ！ わざと受けを狙って？

ケリー ええ、勿論。私の才能の一つなんです、この受け狙いというのが。あなたもそう。今日の晚餐。本当に、心から楽しそうにみんなと話して、話して・・・その間中ずっとパン屑をポロポロ、ポロポロ、テーブルクロス中にこぼしている・・・

ナディアヤ まあ、あれ・・・受け狙いではありませんわ・・・

・ちよっと上つていて・・・

ケリー ええ、まあ・・・そうかもかもしれません。

ナディアヤ お酒かコーヒーク・・・何か如何ですか？

ケリー いえ、結構です。

ナディアヤ 煙草は？

ケリー ええ、戴きます。

ナディアヤ（煙草の箱を捜して。）あら、すっかり・・・箱までなくなっているわ。

ケリー じゃ、結構ですよ。

ナディアヤ（ベルを鳴らして。）ザナが知っています、きつと。（ザナ登場。）煙草はどこ？ ザナ。

ザナ（ぼんやりと・・・まじいことをしたという顔を隠し、とっさに言い訳を考えている。）私の部屋です、陛下。

ナディアヤ（びっくりして。）あなたの部屋に？

ザナ はい、陛下。私・・・あの綺麗な煙草入れが、そこ

らに出しっぱなしでは不用心（ぶようじん）かと思ひまして。

ナディアヤ（事情を悟る。）ええ、そう。そうね。いい所に気がついてくれたわ。じゃあちよっと、持って来て頂戴。

ザナ 畏まりました、陛下。（お辞儀をして退場。）

ケリー（微笑んで。）あなたの侍女はひどく疑り深い性格のようですわ。

ナディアヤ 今は丁度、この宮殿全体が不安の材料で満たされている雰囲気です。彼女のことを責められませんか。（ザナ、煙草入れを持って再び登場。）有難う、ザナ。

（ザナ、お辞儀をして退場。ナディアヤ、ケリーに一本差し出し、自分も一本取る。）

ケリー 有難う。（二人の煙草に火をつける。）

ナディアヤ どうぞお掛けになって。

ケリー いえ、もう行かなければ。

ナディアヤ 大公妃様って、本当に素敵の方！

ケリー ええ、素晴らしいです。

ナディアヤ あの方には人を惹き付ける魅力と思ひ遣りがありますわ。

ケリー この会話、どうも話す必要のないことを無理に喋っているようですね。

ナディアヤ ええ、そう。

ケリー どうしてでしょう。

ナディアヤ 不安のせいですわ、きつと。

ケリー 私と一緒に不安？ するともう最初から私に力量がないということですか。

ナディアヤ いいえ、それは違います。殿下なのですもの、

私が久しく忘れていた安心感を再び私に与えて下さったのは。

ケリー そう言ったださると嬉しいのですが・・・

ナディア 殿下の「物事を見る力」は先程話のあった「受け狙いの才能」のように、見事に表面的なものに止めておくのでしょうか。それとも、物事を深く見通す力なのでしょう。

ケリー ああ、それは深く見通すのです。厭になるくらい深く。

ナディア（真剣に。）外から見ると、相手の誠意に対する酷い裏切りに見える事でも、それを深く見通して下さるのかしら・・・そしてひよっとしてそれを、許しても下さるのかしら。

（ケリー、一瞬ナディアを鋭い目付きで見る。それから微笑む。）

ケリー 仰ることがよく分りませんが、お許しを戴いて、「私はいつでもあなたの親しい、よき味方です」とだけ申し上げておきます。ほら、何と言いましたっけ。そう、「健やかなる時も、悩める時も」です。

ナディア 健やかなる時も、悩める時も・・・

ケリー では、お休みなさい。（ナディアの手にキス。）

ナディア お休みなさい。

（ケリー退場。ナディア、足音が消えてしまつまで待つ。それからケリーの退場した扉に錠をかけ、そつとザナを呼ぶ。）
ナディア ザナ、ザナ。（ザナ、支度部屋の扉から登場。）
あの人、ここに居るのね？

ザナ はい。私の部屋にいらつしゃいます。

ナディア じゃ、急いでテーブルの支度を。

ザナ 畏まりました。

（ザナ、一度退場し、すぐに夕食の品々を一杯に載せたワゴンテーブルを引いて戻る。ナディア、左手の小さなトランプ用テーブルを拵げ、ワゴンテーブルの物をこちらのテーブルに並べる。その時二人、囁くように話す。）

ナディア もう寝ているのね？ ミス・フィップスは。

ザナ はい。先程帰つて来て、今はもう・・・

ナディア あの人（サビアンと分るように扉を指す）、あなたが降りて来た時、その小さな扉の所で待っていたのね？

ザナ そうです。三十分ばかりそこにいらしたようです。

ナディア あなたにはどう見える？ あの人・・・身体の具合が悪いんじゃない？

ザナ いいえ、身体の具合ではありませんわ・・・何が違っているんです。

ナディア（キャビアの壺を手持したまま、動きを止めて。）
何かが違っている！ そう、私も何かが違っているんだわ。

（壺を下に置く。）良かった、キャビアのことを思い出して。
（ザナ、蘭の入った花瓶をテーブルに置く。）

ザナ これをお持ちしましたわ。。とても綺麗でしたので。
ナディア まあザナ、有難う。あなたも忘れていなかったのね。

ザナ 昔に戻つたみたいですね、今夜は。

ナディア ええ、そう。

ザナ シャンペンはこの氷に。これはあの方の方に置いておきましょう。

ナディヤ そうね。

ザナ 他にはもうないと思いますけど・・・

ナディヤ そうね、これで準備終りね。

(二人は遣り残した事がないか、テーブルを見渡す。ザナ、ワゴンを支度部屋に下げ、すぐに戻って来て。)

ザナ もうこれで？・・・

ナディヤ ええ、もう結構。小さい扉の鍵は持ってるわね？

ザナ はい、ここに。(ポケットを軽く叩く。) ちゃんと。

ナディヤ では、お休みなさい、ザナ。

ザナ お休みなさいませ、マダーム。

(ザナ、お辞儀をして退場。ナディヤ、少しの間じつと佇(たたず)む。右手の鏡の所まで行き、自分の顔を見る。それからザナの部屋の扉を静かに叩く。)

ナディヤ (小さい声で。) サビアン、出て来て。

(サビアン登場。ナディヤの両手を取り、片膝をつく。次に両腕でナディヤを抱きしめる。二人、少しの間、ピッタリ身を寄せて佇む。)

ナディヤ さあ、ちょっと放して。あなたのこと、見せて頂戴。・・・あなたってちつとも変らない・・・きつちり、すつきりね。

サビアン これ、分る？(カラーについているカフス釦を指さす。)

ナディヤ ええ、勿論。これはどう？ 覚えてる？(自分のイヤリングを指さす。)

サビアン あのルビーのはじつになったの？

ナディヤ 今も持ってるわ。でも、いつもつける訳じゃな

いの、あれは。とっても重いもの。

サビアン(うつとりと感心して。)(そのドレス、本当に素敵だよ！)

ナディヤ いいでしょう？

サビアン(もの思わしげに微笑む。)(どこから見ても、正に女王の装いだね。あの燃えるような真紅のドレス、覚えている？)

ナディヤ ええ、でも・・・あれは、あの滅茶苦茶なキャバレー・ダリカーントの夜で最後。あれつきり一度も着てないわ。

サビアン(笑って。)(あの晩は散々だったね。シュザンなんて、見ちゃいらなかった！)

ナディヤ 今どこにいるの？ シュザンヌ。

サビアン 会ってないんだ、ここ数箇月。結局モリッスと

結婚したんだだけだね。

ナディヤ ああ、私が言ってた通りになったのね。

サビアン 喧嘩ばかりしてるよ。

ナディヤ あの二人、喧嘩以外、したことあって？ さあ、もう坐つて食事にしましょう。冷たいものしかないけど、キチンと吟味したものでありよ。(ナディヤ、坐る。)(私、晚餐会では、殆ど食べずにいたの。あなたとの食事のためにお腹をすかせておこうと思つて。

サビアン(坐る。)(キャビアか・・・これは素晴らしい！)

ナディヤ シャンパンを開けてね、サビアン。・・・ほら、すぐ横にあるわ。

サビアン OK。(栓を抜き、グラスに注ぐ。)

ナディアヤ　ねえ、あなたのことを話して頂戴。今までどうしていたか。ただ、悲しい話はないのよ。

サビアン　君が行ってしまっただけは、悲しくないことなんて思いつかないなあ……

ナディアヤ（少し間の後。）　そうね……私も。でも、そんな風に二人で悲しい悲しいって言っただけでつまらないでしょう？　トーストを少し頂戴。

サビアン　うん。（トーストを渡す。）　でも、悲しいってことを確かめるのはつまらないことじゃないよ。それは、僕達があつた頃話していたことが全部本当のことだったっていう証拠なんだから。

ナディアヤ　辛いものね、それを思い知らされるのは。

サビアン　うん。だけど僕は、こうなって却って良かったとも思っているんだ。安っぽい手軽な情事……それは駄目だ。花火のようにパツと燃えて、喧嘩して、大袈裟な仲直り……そして終になる……

ナディアヤ　ルースイー・グリフィンとスイリオ・マーンソンのように。

サビアン　それに、ジュリアンとモードのようにな。

ナディアヤ　モードと言えば、あの肥ったお婆さん、可笑しい人だったわね。

サビアン　うん。特にキャンティー（イタリアのワイン）が入ってほろ酔い加減になった時はね。キャンティーが大のお気に入りだったな。

ナディアヤ　もう何年も何年も昔のことのようだよ！

サビアン　ちょっと手をかして。左手を。右手は食事が出

来るように、そのままです。（ナディアヤの手を取る。）　こうしている二人が別れていたなんて、なかつたって言う気がするな。

ナディアヤ　そうね。ねえ、こうしましょ。これは私達の結婚初夜、そして万事何事もなく順調に進行している……そういうことに。

サビアン　うん、やってみよう。でも、かなり骨が折れそうだな、それは。何しろ現実には、僕達の前に大きく立ち塞がっていて、いつでも僕達を押し退けようとしているんだからね。ナディアヤ　私達が今、こうして一緒にいること、愛していること、それ以外に本当の現実なんてないのよ……それがどんなに望みのない現実だとしても。

（ナディアヤ、泣き崩れそうになるが、ぐっと堪える。少しの間。サビアン、グラスをさっと上げて。）

サビアン　僕のナディアヤに！

ナディアヤ　いけないわ。私の名前で乾杯は。縁起が悪いわ。

サビアン（軽く。）　うん。まあ、そうかな。

ナディアヤ（明るく。）　パリの思い出を話しましょう。今ジュリーはどうしているの？

サビアン　相変わらず昔のスタジオ。またマドウレーヌと一緒に。仕事も一緒。そして喧嘩も一緒だ。相変わらず喧嘩囂々（けんけんごうごう）……

ナディアヤ　覚えてるわ、あの喧嘩囂々。呆れたものだったわね。（笑う。）

サビアン　全く、呆れたものさ。（共に笑う。熱狂的に。）

ナディアヤ　あの下階に住んでいたスコットランドのお爺

さんが上つて来て、例のあの台詞「テセ・ヴ・・・テセ・ヴ」

(訳註 仏語 正しくは「テゼ・ヴ(黙れ)」)

サビアン あのぞっとするようなガウン、それにあの酷い訛り・・・

(二人、お互いを見ながら、笑い続ける。やがて笑い声、止む。)

ナディヤ(優しく。) こんなの駄目・・・無理に笑つても無駄。空しい笑い・・・カラカラと虚ろな音がするだけ。こんなこと、もう止みましょう。

サビアン うん。もう止そう。

(また間。)

ナディヤ 「さようなら」って書いた私の手紙を見つけた時、あなた、どうしたの?

サビアン 最初は冗談だと思った。いや、その後もずっとそう信じて・・・そう思い込もつとして・・・随分長いこと。

でも、心の中では分っていたんだ。それで、もう一度君のアパートに行ってみた。守衛がどうしても入れてくれない。それで、シュザン又の部屋のバルコニーからよじ登ったんだ。

あの裏側の小さなバルコニーからね。そして、丸一日、君が残して行ったガラクタの中でじつとしていた。それから後は何もかもが・・・ああ、僕には分らない・・・(頭を垂れる。)

ナディヤ 酷い気分だったわ、あの旅立ちは。あなたを捨てて、突然バリを去るあの旅・・・ほんの数時間前まで何の支障もないように見えた私達の未来、計画・・・それを全部粉々に打ち砕いて去る・・・後には欠片(かけら)一つ残さずに。列車が駅を出て動き始めた時、私は心を静めて、じつ

とあなたのことを思った。自分に言い聞かせた。今あなたと

キスをしているんだ、と。あなたの手、あなたの胸、あなたの唇が私に感じられるようになるまで・・・じつと、じつと・・・両手をぐっと握り締め、目を閉じて、じつと、じつと・・・涙が溢れてきて、目を閉じていられなくなるまで。(涙を拭う。)

・・・人はよく、涙は美しい、涙は真珠だ、なんて書くわ。でもそれは嘘。本当の涙は醜い。本当の涙は望みのないもの。

サビアン うん。醜い。望みなんか無い。(顔を上げる。)

ああ、ナディヤ、何て酷いんだ、運命は。僕らを操り人形のように弄(もてあそ)んだりして。意地悪だよ・・・残酷だよ。

(二人、互いを見つめたまま、じつと静かに坐っている。)

(幕)

第三幕 第二場

(幕が上ると、舞台は暗闇。電話が突然鳴る。少しの間鳴り、すぐ止む。時計が四時を打つ。時を打つ音が消えた後、控えの間に続く観音開きの扉の錠に鍵が差し込まれ、ガチャリと廻る音。クリッシュ将軍とケリー王子、登場。クリッシュ、部屋の灯をつける。二人、囁き声で話す。)

クリッシュ 今、何時ですか?

ケリー 四時です。廊下に出た時、丁度時計が鳴るのが聞こえました。

クリッシュ もうすぐ夜が明ける・・・やれやれ!

ケリー ええ、夜が明けてくれさえすれば、ほっとするんですがね。

クリツシユ（窓の所に行き、カーテン越しに外を覗く。）
広場はコソリとも音がしない。人っ子一人いない。

ケリー いい徴候です。

クリツシユ いや、ちょっと静か過ぎる・・・とは言える。

ケリー 心配もほどほどになさるなければ。神経に酷く悪いです。

クリツシユ 私の神経なら大丈夫です。

ケリー 私の方は駄目ですね。ちょっと何かあると、すぐビクツとする。

クリツシユ 一時間以内にはつきりするでしょう。起きるが、起きないが。

ケリー お世辞にも楽しい一時（ひととき）ではありませぬ。

クリツシユ ミルテの奴、一体何をしてるんだ。

ケリー 今の我々とピツタリ同じでしょう・・・冷や汗をかいていますよ。

クリツシユ（苛々と。）糞っ！ ただ待つしかないのか！

ケリー 彼には、最初の徴候が見え次第ここに電話をかけるよう命じたのですね？

クリツシユ ええ。

ケリー もつ女王陛下をお起しした方が良くはないでしょうか。心の準備をして戴く時間が必要ですからね。

クリツシユ いや、全く何も起らないという可能性もかなりありますから。不要な心配はなるべくおかけしたくない

のです。

ケリー 仰る通りです。シーっ、何だろう、あの音は。

クリツシユ 音ですって？

ケリー（窓のところに行き。）広場で何か聞こえたような気が。

クリツシユ カーテンは開けないで下さい。

ケリー 分りました。（カーテンの隙間から外を覗く。）

クリツシユ どうです？

ケリー 人っ子一人いません。

クリツシユ 糞っ！

ケリー よく見えないな、ここからは。

（支度部屋の扉が開き、ザナ登場。二人を見て「あっ」と驚きの声を上げる。）

クリツシユ（ザナの腕を掴み。）シーっ、静かに！

ザナ 何ですか。何かあったのですか。

クリツシユ 何も起きてはいない・・・まだな。どうしても必要でない限り、陛下を煩わせたくないのだ。

ザナ（寝室の扉に、脅えた目を向けて。）はい。

クリツシユ ミルテ大尉からの電話を待っている。何かの徴候があれば、すぐここに知らせよう命じてあるのだ。

ザナ 民衆が蜂起したのですか？

クリツシユ いや、まだだ。

ザナ（寝室の扉を再びさつと見て。）ああ、神様。私、一体どうしたら・・・

クリツシユ（鋭く。）「どうしたら」？・・・どういうことだ。

ザナ いいえ、何でもありません・・・何でも。私、怖いんです。

ケリー 怖がることはない。ちゃんと逃げられるようにしてある。

ザナ 逃げるなんて・・・そんなこといいんです・・・ああ、どうしよう・・・(ザナ、わっと泣き出す。)

ケリー (ザナの肩を軽く叩いて。)(さあさあ、気をしっかり持って・・・)

ザナ すみません、殿下。私・・・しつかりします。クリッシユ そう、それでいい。ほら、これを少し飲んで。

(水を少し注ぎ、ザナに与える。)

ザナ 有難うございます。(水を少し飲む。)

クリッシユ さあ、いい子だから、もう自分の部屋に戻りなさい。

ザナ (狂気のように。)(駄目、駄目です。・・・ここにさせて・・・ここにさせて下さらなければ。

ケリー 何かあればすぐ知らせます。もし何かあれば・・・まづこの調子ではともなさそうです・・・)

ザナ ここにいらさせて下さい・・・どうか、ここに。クリッシユ 自分の部屋へ行くんだ、ザナ。

ザナ いいえ、いいえ！

クリッシユ シーフ！ 一体全体どうしたんだ、ザナ。

ザナ (クリッシユの袖にしがみついて。)(お願いです、どうかここにいらさせて下さい。静かにしていますから。

ケリー したいようにさせましょう、將軍。さもないとヒステリーを起しますよ。

クリッシユ じゃ、いなさい。(ザナを椅子に坐らせる。)(ただ、じつと静かにして。口をきいてはいけない。)

ケリー 私も坐りましょう。檻の中の動物のようにウロウロするのはもう飽きた。(坐る。)

クリッシユ 煙草はお持ちになりましたか？

ケリー いいえ。でもここに少しあります。(煙草の箱を渡す。)

クリッシユ おや、二本しか残っていませんな。(一本取る。)

ケリー (同じく一本取って。)(陛下は大層愛煙家と見えま

すね。ゆうべはまだ半分は残っていましたから。)

クリッシユ (ケリーと自分の煙草に火をつける。)(さあ。

ケリー 有難う。)

(少しの間。三人、じつと黙って坐っている。)

クリッシユ (苛々と。)(畜生！)

ケリー えっ？ 今何と？

クリッシユ 「畜生」と。

ケリー いや、その通りですね。(再び沈黙。)(こんな状況でも、結婚前の一人者が俺(わび)しく食う夕食よりはま

だましか。

クリッシユ 何ですって？

ケリー いや、とてももう一度言う気にはなれません。面白い話ではありませんでした。

クリッシユ なるほど。

(再び沈黙。)

ケリー この煙草は優秀だ。

クリツシユ（そっけなく。）うまいです。

ケリー 軽過ぎない。

クリツシユ ええ。

ケリー 強過ぎない。

クリツシユ ええ。

ケリー 強過ぎるのは苦手なんです。

クリツシユ ええ。

ケリー 強いと喉（のど）が荒れて……

（また沈黙。非常にゆっくりと照明が薄暗くなり始める。）

ザナ 明かりが……どうなっているのでしょうか、明かり……

クリツシユ シーッ！ 静かに。

（照明がゆっくりと暗くなり、最後にチカチカと明滅する。）

そして照明、消える。）

ケリー これはまづい。

クリツシユ 決定的だ、これは。発電所が抑（おさ）えられたぞ。

ケリー どうしたんでしょう、ミルテ大尉は。

クリツシユ 分りませぬ。

ケリー こちらから電話をかけた方がいいのでは？

（電話が鳴る。ザナ、「あつ」と叫ぶ。）

クリツシユ やつと来たか！（受話器を引つたくるよう

取る。）もしもし、もしもし……そうだ、私だ……何

だって？ よく聞こえないな……よく聞こえないんだ。

もっと大きな声で話せ……もしもし、もしもし……糞っ！

……

ケリー どうしました？

クリツシユ 切れてしまった。電話線を切られたらしい。

ケリー これは内線電話……誰も近づけなかった回線な

のに……

クリツシユ（部屋を横切り、カーテンを後ろに引く。部屋

は明けて間もない朝の冷たい灰色の光に満たされている。）

何たることだ！

ケリー どうしました？

クリツシユ 御覧なさい！

ケリー ああ、どういふことだ、これは。いつの間にあん

なに大勢……

クリツシユ 合図待ちだぞ、あれは。すぐに陛下をお起し

して、ザナ。

ザナ 駄目です。駄目です。

クリツシユ 今すぐ陛下をお起しして……ぐずぐずし

ている暇はない。

ザナ 私……私には出来ません。私……

クリツシユ どういふことだ。何故出来ない。

ザナ 私……私……

クリツシユ（ザナを窓の所へ引つ張って行き。）ほら、見

なさい！

ザナ 一体どうしたら……どうしたらいいの……

クリツシユ さあ、今言つた通り……早くするんだ！

ケリー 私がお起し致します。（寝室の扉に向う。）

ザナ（ケリーを掴んで行かせない。）いいえ、いいえ。私

がします。私が……

(両手で扉をドンドンと叩く。不安で、半ば噁り泣きながら。)
クリツシユ(ザナの肩を掴まえて。)さあ、中に入って。
陛下をお起しするんだ。扉を叩いたりして。何のつもりなんだ。

ザナ(絶望的に。)いいえ、いいえ!

クリツシユ 気でも狂ったか。(ザナを脇へ押しやろうとする。)もういい、私が行く・・・そこをどけ。

ザナ(扉に自分の背をつけて。)駄目です。入ってはいけません。あっちに・・・控えの間に行つて下さい。私がお話します。陛下が逃げられるよう、私が何とかします。お二人がここにいらつしゃれば、陛下はお驚きになります。さ、控えの間に。控えの間に行つて下さい。

クリツシユ(怒つて。)そのドアから離れるんだ。馬鹿な真似はよせ!

(ザナを扉から引き離す。ザナの鋭い叫び声。クリツシユが中に入ろうとする。その時ケリー、その腕を掴む。)

ケリー 待つて! 待つて下さい!

(少しの間、沈黙。その間、ザナの噁り泣きと近づきつつある暴徒達のざわめきだけが聞こえて来る。突然寝室の扉が開き、ナディアが登場。ゆつくりと部屋に入つて来る。夜着の上に近いシヨールを無造作に掛けている。)

ナディア 何ですか。これはどういふことです。

クリツシユ 出来るだけ早急に着替えをすませ、ザナとこの宮殿をお立ち退き戴きたいのです。ピニヤール大尉が階下で陛下をお待ちしています。陛下にはどうか、大尉の護衛のもと、庭を抜けてポートハウスの門の脇に。車を一台待たせ

てあります。

ナディア よく分らないわ。まだ眠いせいかしら。分るよ
うに話して。

ケリー 民衆が蜂起したのです。・・・町の屑共(くずども)が一斉に。

クリツシユ 気を慥(たし)かに持って、ナディア・・・
どうか。

ケリー 逃げるんです。何か着る物を・・・すぐ!

ナディア 私は逃げません。

ケリー(鋭く。)そんな。どうか、言われた通りにして下さい

(ナディア、不思議なものでも見るようにケリーをちょっと見る。そしてザナに。)

ナディア 泣くのは止めなさい! ザナ。

クリツシユ ここに留まるということは、死ぬかもしれないということですよ。

ナディア 私から人生を取り上げるようなことまでして、その結果がこれ・・・お可哀相に。

ザナ(ナディアの手を掴み。)お二人の言う通りです。さ、早く!

ナディア(優しく。)あなたは自分の部屋へ行くのです、
ザナ。そして着替えをします。

ザナ(気が動転するのをやっと抑えて。)はい、分りました。(ザナ退場。)

クリツシユ 何をボヤボヤしているのです。一刻を争う時
ですよ。

ナディアヤ もう言ったでしょう？ 私は逃げるつもりはありません。怖れることなどないのですから。

ケリー 怖れるかどうか、そんなことが問題なのではありません。あなたの命です、問題なのは。あなたは女王なのです。

ナディアヤ 問題なのは私の命？（笑つ。）有難いわ。

ケリー 何のつもりです、その言い方は。それに、何をしようって言うんです、一体。

ナディアヤ（ケリーの言葉を無視して。）クリツシュ、今すぐミス・フィップスの部屋へ。逃げる用意をするよう言うて下さい！ 部屋はあの廊下の突き当たりです。（支度部屋の扉を指さす。）

クリツシュ ナディアヤ！・・・

ナディアヤ さあ早く！（クリツシュ、心を決めかねるよう
にケリーを見る。ケリー、頷く。ナディアヤ、ケリーを見て。）
私の意見を通して下さるのね？ 有難う、ケリー。さあ、ク
リツシュ。

（クリツシュ退場。ナディアヤ、窓際まで行く。）

ケリー 窓には近づかない方がいい。

ナディアヤ（立ち止まり、振り向く。）私のことで気を遣う
ことはないわ。・・・どうでもいいの、もう。

ケリー どうしたんですか、そんな投げ槍な。ついさっき
まであんなに頭がはつきりしていて、分別があつたあなたな
のに。・・・何が原因です。

ナディアヤ 何もかも終りだから。

ケリー そんな態度は英雄的行為じゃないんです。勇気で

もない。単なる我儘です。ただ自分が不幸で、もうどうなつても構わないと思つているものだから、勇敢に振舞つているんじゃないませんか。そういうのをさもない根性と言つんです。

ナディアヤ 逃げなさいと勧めにいらしたんですわね？ じゃ、言いましょ。この国で起つていふこと・・・その原因はこの私です。私一人にその責任があるのです。私はどこに行つても何の役にも立たない。分るでしょう？ 私の人生は失敗で出来ているのです。とどのつまりがこの暴動です。こんなところまで来て、私がまだ逃げるなんて、そんなことある訳がないでしょう。

ケリー あなたは一年前、女王に即位しました。その時、祖国クライアーのために一生を捧げると誓つた筈です。こんな大事な時に個人的な悲しみを持ち込むのは、その誓いを破ることです。たとえ今ここで逃げたとしても、それはクライアーの、真の国民から逃げたものではありません。それは単に、何の考えもない、掃き溜めの、有象無象の群れから逃げただけです。二三週間すればきつと、全ては終ります。そしてあなたが必要になるのです。猛烈に必要に。だから、聞くんです、私の話を・・・顔を背けないで・・・さあ。

ナディアヤ ケリー、許して。私は・・・逃げられないの。

（クリツシュ、急ぎ足で登場。ミス・フィップス後に続く。
きちんと服を着て、落ち着き払つた態度。手に小型のアタッシュ・ケースを下げていふ。部屋を真直ぐ横切り、大机の鍵を明け、書類の束や手紙などを取り出し、ケースに詰める。）

クリツシュ（優しく。ナディアヤに。）どうか陛下、お逃げ

下さい。どうしても必要だからお勧めしているのです。それを分けて下さい。

ナディアヤ 切迫している・・・それはよく分ります。ミス・フィップス、あなたはすぐに出発しなさい。(ザナを呼ぶ。)
ザナ・・・ザナ・・・

ミス・フィップス(意識した冷静さで。)重要な手紙は全て持ちました。御心配はいりません。安全です。

(ザナ登場。やつと身支度を整えたという姿。)

ナディアヤ ザナ、あなたはミス・フィップスと行って。ピニヤール大尉が下で待っています。

ザナ 私だけ?・・・御一緒にはいらっしやらないのですか?

ナディアヤ ええ。

ザナ それなら私も行きません。・・・御一緒でないなんて!

ケリー(苛々と。)やれやれ! ジャンヌ・ダルク顔負けの英雄主義か!

クリッシュ 言われた通りにするんだ、ザナ。

ナディアヤ ザナ、私も行きます・・・後から。だから行って早く。

ザナ(部屋の隅に後ずさりしながら。)行きません。私、本気です。・・・行きません。

クリッシュ ナディアヤ、見て御覧なさい。あなたの強情のせいですよ。あなたの命だけでなく、このザナの命まで危険に晒しているのですか。

ナディアヤ 有難う、ザナ。あなたは留まりなさい。ミス・

フィップス、あなたは行って。

ミス・フィップス はい、陛下。失礼致します。(お辞儀をして、退場。)

ケリー(煙草に火をつけながら。)さてと、これで我々は進退窮まれり、という訳か。

クリッシュ 外は大分明るくなって来ましたな。

ケリー(ナディアヤに。)あなたも全く不幸な方だ・・・暴動をその目で見届けるなど、虫酸(むしず)が走るほどお嫌いの筈ですよ。

ナディアヤ(挑むように。)もう構うものですか、そんなこと!

ケリー それは口先だけのこと。平気でいられる筈などないのです、あなたは。

(石が投げ込まれる。窓が割れ、石がナディアヤの足元に落ちる。ナディアヤ、短い悲鳴を上げる。外から狂暴な喚き声。)

ナディアヤ(歯を食いしばったまま、猛烈な勢いで次の台詞を言う。)そうよ! 仰る通り! 大っ嫌いよ、こんなこと!

(ナディアヤ、石を拾い、クリッシュとケリーが遮(さえぎ)る間を与えず、バルコニーへの三段の踏台を駆け上がり、引き裂くように窓を大きく開く。)

クリッシュ(前へ駆け出して。)気でも違ったか! ナディアヤ。

(女王の出現に、群衆の一人が新たに喚声を上げる。ナディアヤ、拾った石を力一杯群衆めがけて投げつける。大きな苦痛の叫び声。そして完全な沈黙。)

ナディアヤ(馬鹿にするような調子で。)馬鹿者! 大馬鹿

者！（群衆の一人が氣違ひのように笑う。ザナ、金切声を上げ、両手で顔を覆つ。）今なら私はお前達のなすがまま。ここにこうしている。さあ、撃ちなさい。止（とど）めを刺すがいい。（問、誰かが意味不明の叫び。そして再び沈黙。）大して意気地がないのね。お前達の指導者はどこです。物陰にでも潜んでいるのですか。さつさと出て来て、自ら思う所を述べるがいい。（再び問、）そう、公平にやろうつていうのね。黙っているのは、私にも機会を与えようと・・・私自身の主張を言わせ、自己を弁護させようというのね。もしそうなら、それは寛大な計らいとは言える。けれども、愚かなことです。私はお前達の同情心につけこんで、不平不満の種（たね）からお前達の目を逸らさせ、自分の側に少しでも引き込もうと説得するかもしれない。私にその勇氣がありさえすれば。そしてお前達を扇動する者が公衆の広場や居酒屋で、実に巧みにお前達を誑（たぶら）かしたように、私もこのバルコニーからお前達を誑かすことが出来るかもしれない。でもそれは、これまで以上に皆をただ困惑させ、混乱させるだけのこと。それに私はもう疲れきって、頭は苦い怒りで一杯。お前達を説得する力など残ってはいない。お前達のやることなすこと、私の氣に入つたことは何一つありはしない。そして今また！ 何ですか、この不甲斐なさ、優柔不断は。以前は、クライアーの国民こそ、自らの理想に忠実な、確固たる信念を持った人達だと期待していました。それがどうです。お前達には理想も信念もありはしない。あるのはただ、不平不満と怨嗟（えんさ）の聲、そして祖国に対する不忠、不信だけです。私はお前達のために身を粉（こ）にしてきました。

今度はお前達の方が私に奉仕するのです。殺しなさい！ いですか、私はもつこれ以上生きていたくないのです。さあ、お前達の待ち望んでいた絶好の機会です。ちよつとした勇氣さえあれば、すぐ手の届く所に。私が即位して以来この一年間というもの、お前達はこの時を待っていた。正にこの瞬間を待つて、煮えたぎつていたのです。さあ、お前達の目の前に、たつた一人、狙撃の標的のように女王が立っている。威厳も式典も、また祈りさえない死を待つて。さあ、撃つのです。そして起ることを見届けるのです。私はすぐ死ぬでしよう。血に染まつた私の姿など怖れることはない。私の身体から血など一滴も出はしない。出るのはおが屑だけ。辱（はづかし）められ、醜くぼろ屑のように死んで行くだけのこと。（ケリー、無頓着にバルコニーに上り、ナディアの脇に立つ。煙草は吸つたまま。群衆からザワザワと非難の呟きの声。）いけません！ 中に入つて！ 中にお戻り下さい！ あなたを命を賭ける価値などまるでありません。（声を詰らせながら。）ああ、なんて、なんて下らない！ 革命なんて！ ケリー（穏やかに。）クライアーの諸君、もう家に帰つて一眠りしたまえ。（ちよつと笑い声が上る。やがて誰かが国歌を歌い始める。それはすぐに残りの人々に拡がつてゆく。ナディア、ぐつたりと振り返り、窓に凭（もた）れる。ケリー、部屋に戻る。バルコニーへの踏台の下で振り返り、ナディアを待つ。夜明けの光が一筋さつとナディアの顔に射す。ナディア、目から光を遮るように腕をもたげる。国歌は人々が立ち去るにつれ小さくなりながら、暫く続く。）

ナディヤ（弱々しく。）あめ、ひどく疲れたわ。もうこれ以上は無理……。でもあと一丁残っている……。そう、まだ。殿下、私、殿下の優しい心におすがりして、心からお許し戴きたいことが……

ケリー あなたを許す？ どういうことかよく分かりませんが。

（クリッシユとザナ、寢室へと駆け出す。少ししてすべにクリッシユ、戻って来る。寢室から銃声。ナディヤ、叫び声を上げそうになるのを咄嗟に手で口を塞ぐ。そしてがっくりと頭を垂れる。）

クリッシユ（戸口の所で。）陛下、只今男が一人、窓から部屋に入ろうとして撃たれました。お分りになりますね？ 寢室の窓から中に入ろうとして、撃たれたのです。

（ケリー、片膝をつき、ナディヤの手にキスする。）
ナディヤ これでお分りになりましたね？

（幕）

平成十五年（二〇〇三年）四月二十五日 訳

<http://www.aozora.gr.jp> 「能楽」の項 文せ

<http://www.01.246.ne.jp/~trounmi/roumi1/default.html>

Written 1922

First London production: St. Martin's Theatre, 24 August

1926; trans. to Duke of York's Theatre, 4 October 1926 (director. Basil Dean; with Madge Titheradge as Nadya, Herbert Marshall as Prince Keri, and Francis Lister as Sabien Pastal.)

Film versions: silent, by Gainsborough Films, 1928 (dir. and adapt. Graham Fitts); remade by Paramount 1933, as *Tonight Is Ours* (dir. Stuart Wilker; adapt. Edwin Justus Mayer).

Coward plays © The Trustees of the Noel Coward Trust

Agent: Alan Brodie Representation Ltd 211 Piccadilly, London W1V 9LD

Agent-Japan: Martyn Naylor, Naylor Hara International KK 6-7-301

Nampeidaicho Shibuya-ku Tokyo 150 tel: (03) 3463-2560

These are literal translations and are not for performance. Any application for performances of any Coward plays in the Japanese language should be made to Naylor Hara International KK at the above address.